
リリカルなのは～天の御遣いと呼ばれた男

大三元

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのは〜天の御遣いと呼ばれた男

【Nコード】

N7249K

【作者名】

大三元

【あらすじ】

真恋姫無双とリリカルなのはのクロス作品です。真恋姫夢想のエンディング後、元の世界に戻ってしまった北郷一刀。様々な世界に行き強くなった一刀がリリカルなのはの世界に行くとき運命が変わる。

ブローグ

ブローグ

都会とは言えず田舎とも言えない。そんな場所に便利屋「胡蝶」という店がある。

見た目は胡散臭い店である。

その店のドアを女性が開ける。

「いらっしやい。ようこそ便利屋「胡蝶」につて君か」

店の奥の机に座っている20代前半ぐらいの男がだるそうに言い、机の上にある雑誌を読み始めた。

「一応お客よ？」

そんな態度はないんじゃない？」

こちらも20代ぐらいの女性が呆れたような声で答える。

「今で君から報酬をもらった事がないんだが？」

まあ良い。今日はどうしたんだ？」

「闇の書の主の護衛を頼みたいの」

「良いよ。じゃあ行ってくる」

言つと男は雑誌を放り投げ身仕度を始めた。

「ちょっと待って。あなた闇の書知ってるの？というかどこに行くつもりなの？」

女性が慌てながら聞く

「いや、知らないな。とりあえずフル装備で行くが足りるか？」

言いながらあきらかにヤバげな魔具や刀や剣などを取り出し始めた。

「で、場所は？」

「はあ、もう良いわ。場所は地球よ。ただし別の世界のね。言っとくけど行ったら帰って来れないわよ。それでも良い？」

それを聞き男の動きが一瞬止まる。たが次の瞬間には

「じゃあ持っていけない物は後で届けてくれ。」
そう言い、手を差し出した。

「はあ、分かったわ。はいこれ。」

一枚のカードと白緑赤の3つの宝石がついたペンダントを渡した。

「カードは分かるが、こつちのペンダントは何？」

「それはあつちの世界にあるデバイスと言うものよ。詳しい説明はその子達に聞いて。」

「今してくれも良いんじゃないか？」

「説明長いわよ？」

「いいや、面倒だ」と言うとカードに魔力を通し始めた。するとカードから光が放たれ男の姿を包みはじめる。

「私も準備がすんだらそつちに行くから、それまでよろしくね。」

後、あなたの本当の目的もつすぐ叶うわよ。」

「本当か！？おい詳しい説明しろ」と腕を伸ばそうとするが既に体は光に飲み込まれていて自由がきかないらしい。

「私の占いよ。星読みのかんろの占い。」

男は驚いた顔で何か言う前に消えてしまった。

男が消えた部屋で女は一人呟く。

「あなたが関わりと未来が変わってしまうから読みいくいのよね。・
・でもあなたは世界に祝福されている。天に愛されて天の御遣いと
呼ばれるあなたならあの子達を救えると信じているわ。北郷一刀」

少しだが確かに運命は変わり始める。その先に何かあるのか・
まだ誰にも分からない。

第一話（前書き）

恋姫のキャラは一刀以外しばらく出てきません。

第一話

第97管理外世界地球日本・海鳴市・湖

一瞬あたりを強烈な光が包む。光が消えた後に一人の少年が倒れていた。

「はあくもう少し楽に移動できないのか？」ぼやきながら立ち上がると胸元から「マスター少しよろしいでしょうか？」と女性の声が聞こえてきた。

「かまわないけど君は？」

胸元を見ると3つの宝石の内赤い宝石が点滅していた。

「では、自己紹介を。私の名前は紅、緑がリユーフアー、そして白がゼファイです。」

「知っていると思うけど、俺の名前は北郷 一刀。これからよろしくね。」

「はい。」

「うむ」

「・・・」

上から紅、リユーフアー、ゼファイ

(なんか個性的だな?)

「じゃあ依頼の説明をしてほしいんだけど?」

「うむ、なら私から説明しよう。その前に主その湖で自分の姿を見ると良い。」

(リユーファーなんか星みたいだな。)

言われ通り湖をのぞきこむとそこには、子供が映っていた。

(子供？までよさつきから目線が低いし声は高いとは思っていたけどまさか・・・)

「うむ、縮んでいるぞ。主。」何故か楽しげな声のリユーファー。

「なんでさ？」つい某正義の味方みたいな事を呟いてしまった。

「うむ、その事を踏まえて説明しよう。まずは闇の書についてだな。本来は夜天の書と呼ばれる物だ。優秀な魔導師や魔法といった物を記録するための物だったのだが、どごその愚か者どもがいじくつてな、最終的には所有者の命まで奪う物騒な物になってしまったのだよ。依頼の内容は護衛に闇の書の修正といったところですな。後主が子供の姿になった理由は大きく言って2つ。一人は今回の闇の書の主が子供だから、もう一人は主の目的のためだ。詳しくは後で後ろに聞いて欲しい。」

「わかったよ。彼女の事だから何か意味があるんだろ？ところでデバイスって何？」

「ゼファイが話す」

「うお！？喋った！」

「？魔法を使うときに補助する。」

「……………」

「……………」

「そう…ありがとう。かなり分かりやすい説明だったよ。」

（この子は恋に似てるな。）苦笑しながらそんな事を考えていると
「マスターそろそろ行きましよう。」

「そうだね」歩き出しながら答える。

「主、どちらに?」

「とりあえず図書館とかかな?この世界の情報がほしい。」

「さようか、街は反対側ですが?」

「先に言ってよ!」

つい足を止めて怒鳴ってしまう。

「ははは、聞かれませんでしたので」「はあ、もう良いや。」
（デバイスってみんなこうなのか?いや、この子達が個性的なのか
?…多分後者だな。）

ふっと空を見上げると夜明けが迫っていた。

（必ずまた会えると信じているよ。みんな。）

「マスター？どうかしましたか？」

「ん？いや、何でもないよ。」

そう言いつと歩き出す。 運命を変えるために。

第一話（後書き）

次回、八神はやてが登場します。

第二話（前書き）

関西弁が分からない。

第二話

海鳴市・市立図書館。

「さすが市立図書館。なかなか大きいな。」と、できるだけ小さな声で呟く。

「この街には、ほかに図書館が無いみたいですからな。」こちらも小さな声でリユーファーが言う。

「なるほどね。」言いつつ本棚に目を向けると車椅子の少女が上の方にある本を必死に取ろうとしていた。

本人は必死なのだろうがなんとというか、はたから見ると可愛い光景だな。

「主、少女が頑張っている姿は萌えますな。」

リユーファー本当に星みたいだな。なんか悪い笑顔した星が見えるぞ。

苦笑しながら近き、目線から推測した、目当てであろう本を取ってあげる。

「はい、これで良いかい？」

「あ、はい。ありがとうございます。」

「いや、こちらでも微笑ましい光景が見えて良かったよ。」

「はい？」

やば、つい本音が。

「いや、何でもない。他に取ってほしい本ある？」

「それじゃあ……」

その後、一緒に本を読んだり、話をして楽しい一時を過ごした。

「あ、そういえば自己紹介がまだだったね？俺の名前は、北郷一
刀。君の名前は？」

「私、八神はやて입니다。」

「わかった。よろしくね八神さん。」何故俺の周りの「はやて」と
いう名前の奴は幸が薄いんだ？身の上話はさっき聞いた。別に俺か
ら聞いた訳じゃないぞ。

「よろしくね、八神さん。」

「私こそ、よろしゅうな北郷さん。あ、後私の事は、はやてでええ
よ。」

「わかった。じゃあ俺も一刀で良いよ。はやて。」

「ところで一刀はこの後どうするん？」

「そうだな、住む場所を探すかな？」何しろ闇の書の持ち主がどこ
にいるのかさえ知らないしな。後で紅に聞こう。

「じゃあ、うちに来いひん？部屋なら空いてるで？」

「良いの？じゃあお願い出来るかな？」

「何しろ所持金が一万、五千、二千、千、500、100、50、5、1円がそれぞれ一枚ずつの合計18,656円。長期滞在は無理だったからな。」

「ええよ。じゃあうち行こうか。そや帰りに買い物したいんやけど。」

「わかった。荷物は持つよ。」何しろ家に泊めてくれるのだ。それぐらいやる。

「じゃあ行くで。」

「やりますな、主。」図書館を出てスーパーで買い物をしてはやての家に向かって歩き出して少したった頃リユーフアーがはやてに聞こえないほど小さなで話かけてきた。

「何が？」はやてに聞こえないように答える。幸いはやては機嫌が良いのか鼻歌を歌っている。こちらには気づいてないだろう。

「ふふふ、何。さすが数多の武将や軍師を落としてきただけはあると思ひましてな。」

「リユーフアー、少し黙っている。マスター、彼女が闇の書の主です。」

なんか不機嫌な声だな、紅。怖いから言わないが。

・・・ん？今なんて？

「ですから、八神はやてが闇の書の主です。」

ええええええええええつ。はやてが闇の書の主！？混乱していると。

「着いたで。」どうやら家に着いたらしい。

「あ、ああ。」今度は別の意味で驚いた。家でけーーん、何だ？なんか視線を感じるな。

周りを見ても誰もいないしな。もっと遠くまで見てみるか。

搜索範囲を広げようと意識を集中使用としたところに。

「どうしたん？」

「いや、大きな家だと思ってね。」

夜にでも調べるか、今はとりあえず簡単な結界でも貼っておけば平気かな？

「一刀く？」

「ああ、今行く。」そう言って八神家の中に入っていった。

???

見みた人が見惚れるほど綺麗な瞳をした女性が八神家を見ていた。

「さすがね、天の御遣い。まさかこんな事になるなんてね、私の占いは違う結果になったけど・・・あなたなら大事でしょう。」

本当は自分も手伝いたい。

だが占いで未来を見るという事は運命を決めてしまうという事。

決まった運命を変える事が、自分には出来ない。

ゆえに、彼に託した。

今までどんな運命でもねじ伏せ、未来を切り開いてきた男に。

「どうか彼女達に天の祝福を。」祈りを込めて呟く。

第二話（後書き）

次回、シグナム達が登場します。

第三話

「昨日はお楽しみでしたな、主。一晩中はやて殿と一緒に。」

「あのな、君達も一緒だったろ？しかも俺はロリコンじゃない。」

確かに八神はやてと一夜を過ごした。

言っておくが、やましい事は無いぞ。

晩飯の後、はやてが俺の事を聞いてきたから、「別の世界から来た。」って言って紅達を見せたら、目輝かせて「話し聞かせて!!」だもんな。

あれ断れる奴は鬼畜だな。

しかも、紅達も聞きたいとか言い出したし。

まあ、話題はかなり沢山あるし、はやても楽しんでくれたみたいだしな。

途中で寝ちゃってたけど。

紅達は1日や2日ぐらいなら眠らなくても平気らしい。

と、言うよりデバイスって寝るんだ。

紅達曰く「私達は特別。」らしいが……。

おかげで徹夜でお話したたよ。

太陽光で目が破裂しそうだな。

「眠そうですね？主。」

「眠そうじゃなくって真面目に眠いんだよ!!。・・・はやてが眠った後も話し聞かせろって寝かせてくれなかったらう!!。」
「ついでかい声を出してしまう。」

「マスター、まだはやて殿が寝ています。静かにしてください。」
紅に怒られた。

「ん・・・。」ゼフィもプレッシャー放ってるし。何でそんなものだせんだよ!?

こうなればやるべき事は一つ・・・。「すみません」謝るしかないですよね!?

「はあ。昨日感じた視線について調べる時間がなかったな。」
ため息つきながら、ベッドから出ようとしたが、右手をはやてにつかまれてた。

外そうとすれば、起こしてしまうかも知れないし、起きるの待つか?そんな事を考えていると。

「マスター。いくらはやて殿の頼みだとしても一緒にベッドで寝る必要はなかったのでは?」

紅、あの時から不機嫌だな。

――八神家、晩飯後――

「この街にくる前?」食器を洗いながら聞きかえす。ちなみに料理は、はやて。後片付けは、俺って事になっている。最初は料理も手

伝うつもりだったが……。
うん、足手まといにしかなら無いな。

「そう、一刀には私の事沢山話したやん？でも一刀の事、私あんまり知らんし。不公平やる？」

まあ、良いか。いつか話そうとは思ってたし。

「少し、待ってこないかな？後ちよとで終わるから。」洗いながら答える。

やっぱり子供の体は勝手が違うな。まあ、このままでも十分戦えるし。

そういえば俺の持ってた武器や魔具はどうしたんだっけ？

気付いたらなかったな？

紅達に後で聞くか。

「さて、何から話すかね。いろいろやってたしなあ。」はやての向かい側に座る。

「全部や！」

全部って、子供には悪影響な内容もあるんだが？

「あーうん、わかったよ。……まず最初に俺はこの世界の人間じゃない。」

「へ？」お、はやてが固まったな？

まあ、いきなり「別の世界の人間です。」なんて言われても信じないよな。

「どんな世界なんや?!」

へ?信じた?

「あ．．．ああ．．．その前にこれ見て欲しいんだけど．．．」
紅達をはやてに渡す。

「へえ〜。綺麗な宝石やな〜。これがどうしたん?」はやてが首を
傾げつつ聞いてくる。

．．．うん、可愛いな。

「はやてが信じない場合、証拠になるかと思っただけど．．．。
必要なかったね．．．この世界に来る前にもらっただ。>デ
バイスくって言うんだ。」

「デバイス?」はやての頭に?が見えるな。

「まあ、俺もよく分からないんだけどさ。赤が紅、緑がリユーファ、
白がゼフィって言うんだよ。ほら、三人も挨拶。」

「初めまして、はやて殿。紅と言います。」

「リユーファと申します。よろしくはやて殿。」

「．．．．．ゼフィ。」

「こちらこそよろしゅうお願いします。八神はやて言います。」

「で、どんな世界なん?話し聞かせて。」そんな目輝かせてこっち
見ないで欲しい。

「マスター、私達も聞きたいのですが？」

「あゝ長くなるから先に寝る準備してからね。それからでも良いだろ？」夜更かしは不味いよな。まだ八歳らしいし。」

「はい。」

まあ楽しそうだし、良いか。

「で……何故こうなる？」

「話聞かせてくれるんよね？」

「うん、でもさ……一緒にベッドで寝る必要は無いんじゃないかな？」

「良いじゃないですか？」

紅、すごい怖いですけど。

下手な上級悪魔の方がまし何だけど……。怒らせるような事してないはずなんだがな？

「ほら、紅も良い言つとるし。な！」そんな良い笑顔で言わないで。

「もう良いよ、はあ……。じゃあ、話すよ。まず……。」

――回想終了――

「しかし、よく寝てるな。」空いてる手で頬をつっついてみる。

柔らかいな〜。

・・・本当に起きないな。

「ふあ〜〜〜。」

あー俺も眠い。最近、悪魔刈るので忙しかったから、ろくに寝てなかったんだよな。

よし。

「紅、悪いんだがはやてが起きたら起こして。」

瞼が重い。頭も働かないし、寝る・・・し・・・か・・・な。

「わかりました。お休みなさい、ご主人様。」

ん？何か懐か・・・。。。

「紅、今のは不味いのは無いか？我らの事は口止めされていただろつに。」

「すまん、つい。」

「>ついくでは無い。全く、主に気付かれたらどうする積もりだ？
・まあ、お主の気持ちもわからんでは、無いがな。」

「二人とも、静かにする。」

「ふ・・・そうだな。ゼフィの言う通りだ。」

「うむ。・・・静かにする事にしよう。」

(良い夢を見てください。>ご主人様く)

こうして八神家での最初の日は終わった。

余談だが、はやてのお話聞かせては、一週間続く事になる。

結果、最初に感じた視線について調べる期を逃す事になるのだが、天の御遣いはまだ知らないのであった。

第三話（後書き）

そろそろシグナム達出したいんですが・・・小説書く才能がほしい。

第四話（前書き）

短いです。

第四話

「――深夜・八神家・屋根の上――」

「何故、このような場所に?・・・マスター。」

紅が話しかけてくる。ちなみに紅達は、それぞれ分離できるので、リユーファー、ゼフィは今はやてに渡してある。

ちなみにはやてはもう寝てる。

「ん・・・・。ちよつと街が見たくてね。」

6月でも深夜は冷えるな。

はやて、ちゃんと布団かけてるかな?

「前から感じては、いたんだけど・・・・。うん、この街すごいな。」

答えながら意識を集中し搜索範囲を広げる。広域搜索は、かなり得意だ。

「すごい?」

「うん。・・・・力が集まる場所が沢山ある。」

これは、いろんな物を呼ぶな。

目星を付けた地域をそれぞれ詳細に調べる。

「それに住んでる人達も個性的だね。」

達人級が数人に魔力が馬鹿みたいに高い子供か……まあ、悪そうな人達ではないし平気かな。

「それは、どう「今度ね。」「マスター!!!」

「平気だよ。良い人そうだしさ。」

「はあ~~~~~。もう良いです。……ところで闇の書の方はどう何です?」

「ん?……正直今のところはお手上げだな。……『覚醒してくれないと』。」

例えるなら、パソコンのプログラムの修正をしようとしても、パソコンが起動してないって状況だからな。

「そうですか……」
「そんな不安げに言わないでくれ。」

「今は、はやての負担を軽くする事に専念しよう。」

紅達曰く、はやての成長途中のリンカーコアの魔力を闇の書が侵食しているのが、原因らしい。

「何か考えがあるのですか?」

「いや、……無い!~!」

「えばるな!!!!!!!!!!」

そんな怒鳴らなくても……………。冗談なのに。

「ま、いくつか手は考えているよ。」

「それならそうと言ってください?」

「悪かった。」

雰囲気変えようとしただけなのに(T|T)…………マジ怖い。

「だけどさ…………。」

「はい?」

深呼吸をしてから呟く。

「俺が、居る限り…………仲間を、はやてを死なせたりしない。

絶対にな…………手伝ってくれるよね?…………紅?」

静かにだけど確かな決意を込めて、信頼する仲間に尋ねる。

「…………当然です。我がマスターよ。あなたがあなたのままで、あるなら…………何処までもお供致しましょう。」

どんな答えが返ってくるか、わかっていた。

しかし、尋ねずにはいられなかった。

どうしても答えを聞きたかった。

「。じ。ん。あ。り。が。と。じ。ん。」

それは弱さか、それとも

第四話（後書き）

ついに、やっと次回ジグナム達登場です。

第五話

「主、官ろ） 本来は車に各と書く）から荷物が届いていますぞ」
はやてが図書館に出かけて少したった頃にリユーフアーがそう言うて起こしてきた。

ちなみにはやてには、護衛として式をつけている。何故そんなもの使えるかと言うと、昔行つた世界で安倍晴明の孫に教えてもらった。

「ん？・・・本と手紙か？」

転移魔法で送つてきたのか、そんなに重要な物なのか？

とりあえず手紙を読むか。

『一刀へ。』

この本は、あなたにとって大事な物よ。大切にしなさい。
追伸、この世界では月見と名乗ってます。これからは月見と呼ぶように。かんろ改めて月見より』

また名前変えたのか、まあ本名知らないけど。それより本だな。

「俺にとって大事な物ね・・・この本がねえ〜」

見た目は闇の書に似ているな。違つところは色が赤い所と表紙に刻まれた十字の印か。

中を確認しようと、本に手を伸ばし、触れた瞬間。

「な!!!」

本が光の粒子になり、紅達に吸い込まれていった。

「紅いったい何が？」

「いえ、私達にもわかりません」

「そうか、仕方ないな」

かん・・月見に聞けばわかるだろ。

なんかあいつに聞かないといけない事が増えてきたな。
何時もの事だけどさ。

はやては今・・・図書館か。

だったら、はやてが帰ってくるまでまだ時間があるし寝直そう。――
――
後―― 数時間

「だだいま〜!」

「おかえり〜」

はやての護衛につけといた式をばれないように回収しながら答える。

「そういえば、さっき石田先生から電話があつてさ。明日の検査の後、一緒にご飯食べようだつてさ」

「ほんま!!!」

おゝ満面の笑みだな。

ちなみに石田先生ははやての主治医で、俺も何回か会った事がある
が良い人だ。

「ほんま、ほんま」

「そうか〜。楽しみやな〜」

本当に楽しそうだな。

「という訳で、今日のお話しは無しで」

「ええ!!!!!!そんな〜」

いや、そんな残念そうにしないでも…………。

「最近、夜遅くまで起きてたろ？」

子供なんだから夜更かしは良くない。まあ、夜更かしの原因は俺だけだね。

「そうやけど…………でもなあ〜」

「明日は寝坊出来ないし。今日ぐらいは早く寝ような」

「ううう、わかったわ。…………ただし明日は、たっぷり話し聞かせてもらおうで!」

「うん、まあ誕生日だし良いよ」

なにしろ誕生日なのにプレゼント一つあげれないからな、金が無くて。

小学生に負ける経済力が…………(T|T) そう言えば、はやての金はだれが?

はやてのお父さんの友人らしいが、ここまで贅沢できる金額を援助するなんてよほど良い人なのか…………それとも…………。

「どうしたん？」

「あ、ああ。別に何でもないよ」

「嘘や！」

「断言!？」

「そろそろ一緒に暮らしてるんやしわかるよ。・・・でなんや？」

鋭い。

「本当に大した事じゃなくてね。・・・ただはやてのお父さんの友人に会ってみたいなって思ってたさ」嘘じゃない。

「ああ、私も会いたいとは思っくんやけどな？まだ会ったことないねん」

なに？会ったこと無いだと・・・よし、後で調べよう。

「そうか、まあその内会えるさ」「そうやね。さして夕飯作るか」

「ん。手伝うよ。何したら良い？」

「ん、そうやね、あ！牛乳が無いんやった。

悪いんけど買って来てほしいわ」

「牛乳ね、わかったよ」

「うん。よろしゅうな」

「じゃあ、行って来ます」「ついでに色々やっどくか。

さて、この辺で良いか。

「紅、とりあえず結界の補強を。」

リユーフアーは新たな結界。

ゼフィは警戒エリアを広げるから手伝って」

「わかりました」

「うむ」

「・・・わかった」

ざっと五分ぐらいで完成つと。

良い仕事だな。

まあ紅達のサポートがあるから何だけどな。

「さて、牛乳買って帰ろう」

――数時間後・はやての部屋――

さて、はやても寝たし。

「ゼフィ、青龍と朱雀出して」

「ん」

俺がこの世界に持ってきた武器や魔具はゼフィが保管している。

何でもかなり沢山の物が入るとか。

ちなみに青龍、朱雀はダンテの銃を参考に俺が作った。

青龍が威力、朱雀が連射重視。

外見はダンテの銃とほとんど変わらない。

違うのは色ぐらいか。

「さて……と」

銃の手入れをするか。

なにしろ最近ほったらかしだったしな。

他の武器もやらないと、特に銃は整備不良で暴発なんてなったらシヤレにならん。

「主、此処でやるのですか？」

「そうだけど？」「グリスの臭いなどは、どうするつもりです？」

「ああ……空気の浄化やつてるから平気だよ」

銃身の汚れの掃除にグリスアップ終了。

組み立てながら呟く。

「たださ……子供の姿じゃ……片方ずつしか使えないんだよな……」

何しろ、青龍が25・朱雀が20キロだからな。

「マスター……今の体は子供なのですから、早く寝てください」

「はい……」

何か涙が……

時刻は、11時50分か確かに子供が起きてる時間じゃないな。

「……寝るよ。時間になったら起こして」

「はい」

「うむ」

「……ん……」

――――30分後――――紅side

「マスター!!!」

「主!!!」

「・・・一刀」

「一刀」

「zzz……」

「起きんな?」

「はあ、すまないがシグナム殿、はやて殿を連れて先にリビングに行つといてくれ」

「あ・ああ、分かった」

シグナム殿達が部屋を出て行ったの確認してから大声ではなく、念話で。

《ご主人様!!!!!!》

「うおお!? 愛紗!?

別にサボつてたわけじゃないんだ。息抜きというかその「マスター落ち着いてください」あれ? 紅?」

「あれ? 紅ではありません。良くあの騒ぎの中眠っていられたましたね?」

ある意味感心しました。「はあ、はやて殿ですら起きたというのに。

「あ? ああ。闇の書の覚醒の事?」

「気づいたのですか!?

「うん」

「「うん」じゃない?!」

「いや、だってさ。俺が起きてたら、騎士達と揉めそうじゃないか。

それにはやてに危害が及ぶようなら、すぐ動けるようにしてたし
そう言っつていつの間にか持っていたナイフを見せてきた。

「はあく。分かりました。」

はやて殿達がリビングで待っています。

行きましよう」

紅side終了

リビングに入るとはやてと変な格好の4人組がこっちを見てきた。

何か目が胡散臭いなこの野郎みたいな感じ何ですが？

まあとりあえず

「ごめん、はやて遅くなった。」

それとそちらの人達も、俺の名前は北郷 一刀と言います。

よろしくお願いします」そう言っつて頭を下げる。

礼儀っつて大事だよな。

するとピンクの髪美人な女性が「シグナムだ」

こちらも美人な金髪の女性が「シャマルよ」

で、未来が楽しみな子供が「ヴィータ」

それで最後に筋肉質で頭に犬耳？が生えてる男の人が「ザフィーラ
だ」

さて、俺が来るまでにはやてに自分たちの説明をしていたらしい。

「まあ、良かったな。」

はやて、家族が増えて」

「あはは〜いきなり4人も増えたな〜。」
ご機嫌だな。

「で？何故メジャーを持つてるんだ？」

「闇の書の主としてみんなの面倒をきつちりみなあかんやろ？
住む場所はあるし、料理も得意やし一刀もおる。

残る問題は服だけや」俺は関係無いと思うが？

「あ〜で、メジャーか」サイズ測るのか。

「服買つてこないとあかんからサイズ、測らせてな」

「主、その前にその者と戦わせて欲しいのですが？」 シグナムさん
が俺を睨みながらはやてに聞く。

「一刀と？あか「構わないよ。」一刀!？」

「まあ、良いじゃないかはやて。」

多分、こうでもしなければ納得しないだろ？」

「ほう…わかっているなら話は早い」

「ただし、俺が勝つたら仲間と認めてもらつよ」

「良いだろ。私が勝つたら貴様は何者が教えてもらつぞ」

「分かった」

さて、この世界で最初の戦闘か……この体でどこまでやれるか
な？

第五話（後書き）

次回初の戦闘です。

第六話（前書き）

戦闘シーン難しいな。

第六話

時は少し遡る

——シグナムsideer——

私達の事や、闇の書について説明を終えた後

「主聞きたいことがあるのですが、良いでしょうか？」

「ええよ。何や？」

「この結界は誰が？」

ここまで強固で複雑な結界は今まで見たことが無い。

「ん〜多分、一刀やな。」

「一刀？」

「私の隣で寝てる子や。」

そう言つて隣を指さす。確かに主と年の変わらない子供が寝ていた。闇の書の覚醒時の騒動で起きなかったのか？

首に掛かっているのは、デバイス！？いや、それより…

シグナム。こいつ何時からいた！？

念話でヴィータが聞いてくる。

分からん。……………気配がなさ……………いや……………自然すぎて気付かなかった

そう……………自然すぎるのだ。まるで空気みたいなそれで居て一度気づ

けば、意識せずには居られない。
何にしるこの存在感はとも子供が出せる物ではない。

「一刀く起きてな？」

主が起こそうと揺すっているが起きる気配がない。だが、騎士としての勘が告げている。今、主に危害を加えようものなら……アイツは必ず牙をむく。

…………… 一体何者なんだ？

————シグナムside終————

————現在————

海鳴市・とある公園

「で、主？どうやって戦う積もりです？」
リユーファーが尋ねてくる。

「あゝそうだな……………うん、無名と白虎出して」無名は日本刀、白虎は肘から手の甲までを覆う、手甲だ。

「ほう、我々を使わないと？」
なんか不満みたいだな？

「うん。……………彼女は強いからね。

使い慣れた武器の方が良いと思ってさ」
本当は気分だけ……………怖いから言わない。

「さて、やるうか？」

無名を左手に持ち、体を気で強化する。

「いいだろ」

シグナムさんが剣を構える。

「じゃ、小手調べに！」

間合いを一気に詰め無名を振り抜く。

「甘い!!」

簡単に剣で防がれた。……本気ではないけどまさか簡単に防がれるとは。

「だけど……」

「はああああ!!」

手に力を込めそのまま振り切る!!

「何!?!」

「ぶつ飛べええ!!!!!!」

「ちい!!」

2、3メートルは吹き飛ばす。

さらに、無名に魔力を通し一歩踏み出しながら。

「突っ走れ!!」

込められた魔力に剣風が絡み合い、強大な魔力の刃を形成する。

「レヴァンティン!!カートリッジロード」

するとシグナムのさんの剣が炎に包まれ、魔力の刃を叩き切る。

「な!?!」

「次はこちらから行くぞ!!!!!!」

紫電一閃!!!!!!」

高速で近づいて、炎を纏ったレヴァンティンを振り下ろしてくる。
ちっ速い。

避けれるが……いや、下ろしてくるなら、打ち上げよう。

「昇竜!!!!!!」

刀を逆手で右手に持ち、気と魔力で強化かした足で思い切り地面を蹴る。

剣と刀が上空でぶつかり合う。

「くっ!!!!」

「ちいい!!!!」

結果はお互いに吹っ飛び、地面に叩きつけられる。

やや前方に落ちたシグナムさんに対し、地面を蹴り付け前方に跳び、
右手に魔力を纏わせ殴りかかる。

「食らえ!!!!!!」

「断る!!!!!!」

レヴァンティン!!!!!!」

シグナムさんが叫んだ直後、レヴァンティンが連結刃になる。

「レヴァンティン、カートリッジロード!!!!!!」

連結刃の刀身に紫色の炎を纏わせ……………。

「飛竜一閃!!!!!!!!!!!!!!」

まるで蛇みたいなきををする剣に対し、避けるのは無理だと判断する。

なら、やる事は一つ。

「真正面から迎え撃つ!!!!!!!!!!!!!!」

無名をしまい、腰を低くし、右手に魔力を、左手に気を込める。そして……………レヴァンティンの刃を全力で殴る!!

瞬間、大爆発が起きた。

————シグナムside——

やりすぎたか？

爆発の煙を見つめながら、シュランゲフォームを解除しようとした瞬間。

「うおおお!!!!!!!!!!!!!!」

爆発の煙の中から北郷が飛び出してきた。

「何!!!!!!!!くつレヴァンティン、カートリッジロード」
再びレヴァンティンの刃に炎を纏わせる。

「これで終わりだ!!!!!!!!!!!!!!」

「神速の一撃!!!!!!!!!!!!!!」

「飛竜一閃!!!!!!!!!!!!!!」

刀と剣がぶつかり……………そして……………

「く……」

気を失っていたのか……。

目を開けると、

「お？」

目覚めた？」

北郷がいた。

「はやて〜シグナムさん起きたよ〜」

「シグナム！？大丈夫なん！？」

主が近づいてくる。

「大丈夫だってば、はやては心配しすぎだよ。」

「そう言う一刀だって心配してたくせに〜」

「うゝ、いやだってな。」

やりすぎた感がそのな？」

「な？やない。シグナムへーきなん？」

「はい、もう大丈夫です。」

グイータ達は？」

すると北郷が

「ああ、先に帰ってもらったんだよ。」

何しろお互いぼろぼろだろ？風呂を沸かしといて欲しくてね。

グイータは残ると言っていたけど、ここは俺の結界の中だし危険は無いから平気だって言ったら了承してくれたよ」

「まあ、さすが数多の武将や軍師を落としてきただけの事はありますな。」

北郷のデバイスが何か言ったが小さくて聞き取れなかった。

「今、何か？」

「何でもないよー！！」

「そうか？」

「さて、そろそろ帰るか。明日は早いで〜」

「はい」

「そうだね」

主の家の向かい歩きながら隣を歩く北郷に話しかける。ちなみに主の車椅子は北郷が押している。

「北郷、私の事は呼び捨て構わん。」

「ん？そうなら俺の事は一刀で良いよ。シグナム」

「そうか？わかった一刀」

「あ！！俺の事は明日話すよ」

楽しそうに笑いながらそんな事を言い出した。

何だと？

「だが、私は負けた」

「え？あゝいや、勝ち負け関係なしに話すつもりだったし」

「何？では何故私と戦った？」

「え？あゝ何となくかな？」

「何となく？」

つい聞き返してしまう。

「そう。何となく。」

満足したでしょ？」

そう言つて笑みを浮かべる一刀を見て……………一瞬だが、その笑みに心惹かれる。

後に私は気付く。

この時私は一刀に惚れたのだと……………。

第七話

――闇の書の覚醒から数日後――

「ふむ。」

索敵に何か引つかかったから来てみたが……………まさか悪魔がいるとは……………」

「主、あれをご存じで？」

「まあね……………何度も戦ったよ」

目の前には、ブレイドと呼ばれる、まるでトカゲが武具を装備したような外見の悪魔が二体いた。

(何で、こいつらが此処に?……………まあ良い。
被害が出る前に刈る)

こちらに気づいたのか、叫びつつ向かってくる。

悪魔達にとって、人間の子供は最高の獲物なのだろう。

だが、今回は相手が悪かった。

何しろ見た目は子供でも数多くの戦場を乗り越えてきたのだ。

その中で鍛えられた魔力や技は子供の体に成っても健在である。この程度の相手なら負ける事は無い。

「ふ……!」

突っ込んできた一体を蹴り飛ばし、もう一体に銃 青龍 の弾丸を喰らわせる。

青龍の弾丸を浴びるように喰らった一体は、「オオオオウオオン」

という叫び声を上げながら息絶える。

もう一体の方は、強く蹴りすぎたのだろう。
潰れたトマトみたいに成っていた。

青龍を仕舞い、無名刀を取り出す。

「出て来いよ……いや……こっちから行った方が速いか」

後方の空間を無名刀で切り裂く。

「見たことは無いが…雑魚だな」

恐らくブレイドの亜種なのだろう。

人型のトカゲみたいなの悪魔が紫色の血を噴き出しながら倒れる。それを視界の端に確認し、無名刀についた血を振り払い納刀する。

「変だな？」

ついこの前まで悪魔なんか居なかったんだが……いきなり三体か」

悪魔達は魔界と呼ばれる世界の住人であり、本来ならこの世界には来れない。

何故なら、魔界とこの世界の間には網状の壁みたいのがある。

強大な悪魔はその力のせいで通る事が出来ない。

だが、力の弱い悪魔は網の目をくぐり抜けこちらの世界に現れる。

まあ、網の目をくぐり抜けてこちらに来るのは雑魚なので問題ない。

（だが、今までこちらに悪魔が現れた痕跡は無い。………嫌な予感がするな）

「マスター。」

一旦、帰りましょう。

そろそろはやて殿が起きる時間です。それに……………この事はシグナム達と協議するべきです」

「……………そうだな。

だけどその前に何か用？」

後ろを振り返る。そこにはやてと同じぐらいの年格好のツインテールの女の子が、杖みたいな物をこちらに向け立っていた。

(くそ…結界の外で戦うのは、不味かったか…まさか子供に見つかるとは……………)

心の中でつい愚痴る。

(震えているが、悪魔を見て戦意を失わないとは、凄い子だな)さて、どうするか……………。

—————なのはside—————

レイジングハートが強力な魔力反応を察知したから、来てみたら…目の前で男の子がトカゲみたいな生き物に襲われ……………うっん、違う。あれは、あの子がトカゲみたいな生き物を一方的に刀や銃で殺した。

「そんなに警戒しなくても良いだろ？」

あゝほら、武器しまっから」

男の子が話しかけてきた。よく見れば人の良さそうな顔をしている

が、血まみれなので、はつきり言って怖い。
(ユーノ君くフェイトちゃんこの人良い人そうだけど、怖いよ)
もう涙目である。

「はあ、まあ良いや。」

俺の名前は、北郷 一刀。

君の名前は？」

「高町 なのはです」

「じゃあ高町さん。」

「一応聞くけど悪魔、見たの初めて？」

北郷君がこちらに歩きながら聞いて来る。
それより……………

「悪魔？」

「あゝ良いや、その反応でわかった。聞きたい？」

「うん」

「わかったよ。」

ただ長くなるから……………そうだな……………よし、じつじつ。

今日の夜、ここに来てくれない？」

「えっでも」

「大丈夫。逃げたりしないよ。」

約束する」

真剣な顔で私を見る。

「わかりました」

「ありがとう。」

じゃあ、夜に会おう。

ああ、信頼できる人なら連れて来て良いよ」

言いながら、複雑な模様のカードのような物を渡してきた。

「それがあれば簡単に人を呼べるよ。
じゃあね」

そう言うと歩いて行ってしまった。

手元のカードを見ながら（信頼できる人か）ユーノ君にフェイトちゃんにクロノ君に後……………）

その後、目の前の光景に（紫色の血と悪魔の死体） 気づき慌ててその場を離れるのがいた。

……なのはside終……

さて、何故俺は正座をさせられているの？

「……分からない？（らん、か）」

目の前に悪魔より、怖い人達があります。

助けてください。

諦めなさい。マスター

紅が念話で語りかけてくる。

あの後、悪魔の血にまみれた俺を見て八神家はパニックになり、事

の次第を話たら、いきなり正座をしるだもんな。

「ほう？余裕だな。

一刀」

シグナムさん、デバイスを首に突きつけるの止めてください。

ヴィータに助けを求めようと思い、見ると……こちらもハンマーを構えてるし、しかも顔がマジだ!!

シヤマルは!?

「うふふ」

黒いオーラを出してんですけど……!!……!!……!!

はやては!……!!……!!

「う〜」

めっちゃ、涙目なんですけど……!!……!!……!!

ザフィーラを見ると……犬状態でも怒ってるのがわかる。

これが四面楚歌か、一面多いが……。……。

とりあえず。

「ごめんなさい」

土下座しかないですよね……!!……!!……!!

ヤバい、マジで怖い。

このプレッシャーは上級悪魔を軽く超えるぞ。

「……一刀」

「はい!？」

一応顔を上げる

すごく良い笑顔を浮かべている悪魔×三に涙目×一に犬×一。

「もう、ええよ。

一刀」

「はやて……」

「ただな、一人でむちゃせんといて、お願いや」

よく見れば震えてるな………そっか……心配かけたよな。

「うん……ごめん」

「主、宜しいので？」

「うん、私はええよ」

「ならば、私が言うことは無い」

「私も」

「はやてが良いなら………」

「うむ」

良い人達だな。

本当に。

「ありがとう」

「ええって、ただし無茶はアカンで」

「うん、約束する」

無茶は駄目か………敵しいな。

「さて、やるぞ！

一刀」

シグナム何故そんなに目をキラキラさせているんだい？

「何を？」

大体、想像はつくが。

「うむ、模擬戦だ！！
シヤマル、結界を！」

やっぱり。

「ええ。」

わかったわ

「あー！ー！！シグナムずりいー！一刀！！次は私だ！！」もう勝手にして。

はやては爆笑してるし、シヤマルも結界貼るし……………はあ〜夜まで生きてるかな〜俺？

うなだれていると、ザフィーラが肩に右前足をのせてきた。

「頑張れ」

「助けてはくれない？」

シグナム達を見てからこちらを見る。

「無理だ」

「ですよね」

あれに逆らおうとは、思わない。

「一刀！！何している！！」

速く来い！！」

「は~~~~~い」

もう自棄だ。

その後、シグナムとヴィータとの模擬戦に勝った後に、これからの事をみんなと話し合い。

結果は、向こうが信頼できると判断出来るまで、はやて達の事は伏せておく事と一人で悪魔と戦う事を禁止された。

第七話（後書き）

内容変わる可能性あり

次回予告

高町　なのはとの約束の場所に行くよ。

その場には、時空管理局のメンバー達が……。

悪魔の説明をしながら、悪魔がこの世界に来るときに使った可能性
がある次元の歪みに向かう。

そこには巨大な扉が……………。

その扉の中に飛び込む天の御遣い。

その真意は？

次回、第八話・少女の願い

第八話（前書き）

次回予告とは違う感じがしなくもない。

この一刀はオリキャラかしています。

後、蜀ルート後の一刀とう設定です。

まあ、オリジナルストーリーの蜀ルートですが。

第八話

「――魔界・???――」

魔力で覆われた森の一角に巨大な蜘蛛が佇んでいた。

全身を堅い甲殻で覆い、その身を流れるのは、血では無く灼熱の溶岩である。

ファントム、それが蜘蛛の名だった。

よく見れば、その複眼が全て同じ方向を向いているのが解るだろう。

「また、見ているのか？」

上空から巨大なロツク鳥に似た悪魔が大蜘蛛に話し掛ける。

「……………うむ」

「見ていて、楽しい物でもあるまいに」

ファントムの視線の先には、光の中に眠る女性と少女がいた。

先のP・T事件を引き起こし、その事件の最中に行方不明になった、プレシア・テストロツサにその娘であるアリシア・テストロツサである。死んだ娘を生き返らせるためにアルハザートに行こうとしたプレシアだったが運命のいたずらか、魔界に流れ着いていた。

普通なら、とうの昔に悪魔の餌食になっているのだろうが、幸か不幸かジェエルシードの魔力に守られ上級悪魔ですら近づく事が出来ない。

しかも、数カ月は過ぎているはずだが、まるで変化が無い。時が止まっているかのようである。

その証拠にファントムが見つけてから今日までの間プレシアは眠ったままでありアリシアにも状態に変化が無い。

「人は不思議な生き物だな」

「……………確かに」

「弱く、脆く、小さく、だが何か悪魔には無い力を持っている」口ツク鳥が上空から降り立つ。

「あら？ファントムともあるう者が変な事言うわね」

まるで娼婦を想わせる姿をした美女が雷を纏い現れた。

「ネヴァンか……………」

「グリフォンまで、また見ているの？忙しいんじゃない？」

「む、主も見に来ているのだろうか」

プレシア達を見ながら、グリフォンが答える。

「良いのよ。私はね、あなた達みたいに魔帝の腹心と言う訳ではないのよ。やる事はそんなに無いわ」

「ふん、魔界も安定してきた今、我らにやる事などほぼ無い」

「へえ〜。そういえばグリフォン聞いたわよ。人間を見逃したらしいわね？」

「ただの気まぐれだ。他意はない」プレシア達から目を離しネヴァンを見ながら唸るように答える。

「そう？なら良いわ」

つい先日の事である。人間界に偵察に行き、たまたまそこに居合わせた人間と戦い、その人間達を見逃したのだ。何故と聞かれれば、答える事は出来ない。

ただその場に居た一人の男の行動が気になった、ただそれだけなの

である。

仲間を助けるためにグリフォンに突っ込んできたのだ。

(ティータと言ったか……)

その行動を見て急にやる気が無くなった。故に見逃したのだ。

「お前達に聞きたい。お前達は人を認めるか？」

ファントムが視線をそらず呟く。

「……………どちらとも言えんな」

グリフォンが羽を広げながら答える。

「……………そうね。その子達を助けに魔界まで来る奴なら認めても良いわ」

ネヴァンがプレシア達を指差しながら言う。

「ふ……………そんな奴がいたら我も認めよう。居るはず無いがな」

彼らはまだ知らない。誰かのために魔界に飛び込む人間がいる事を

……………。

——海鳴市——

高町さんとの約束の場所に行き、高町さんが呼んだ人達に自己紹介をすませ、悪魔についての説明を済ませた。

自己紹介の途中で一悶着あったが、それはまた今度。

ちなみに、高町さんが呼んだ人達は、クロノ・ハラオウンさん、リンディ・ハラオウンさん、ユーノ・スクライアさんの三人。本当はもっと呼ぼうとしたが、リンディさんと話し合い結果この三人になっただけらしい。

「で？何か質問は？」

「はあく本来は信じられない話なのだがな。レイジングハートの記録に、最近になって時空管理局にも同様の生物の報告がきている。信じるしかないな」

クロノさんが腕を組みながら言う。

「ええ、そうね。しかし一刀さん？あなたは何者なのかしら？」

リンディさんがこちらを見ながら言う。そう言えばクロノさんのお母さん何だよな。見えないよな。

「悪魔狩人ですよ」

嘘じゃない。正しくは悪魔狩人でもあるっと言うのが正解だけど。

「そう」

読めないな。まあ良いや、良い人そうだし。

「さて、今からみんなで行きたい所があるんだ」

「どこに？」

ユーノさんが聞いてくる。この人の魔力……………高町さんとよく一緒にいた人だな。

それはさて置き、最高の笑顔で言い放つ。

「悪魔がこの世界に来るときに使った場所」

——海鳴市・???——

そこは本当に海鳴市なのだろうか？空は濁り異様な木々が生い茂り、何より悪意が濃い。

そんな場所を歩いている人達がいた。

後方を歩く少女が先頭を歩く少年に尋ねる。

「海鳴市にこんな場所があるなんて……………」

「高町さん。正確に言えば、ここは海鳴市では無いよ」

「え？」

驚いたのだろう。足を止めてしまう。

「魔界と人間界の狭間みたいな所かな」

魔界とは言えずかといって人間では無い。言うならば、人間界の終わりまたは、魔界の始まりの場所。

「大丈夫なのか？」

少女の前を歩く黒い少年が聞く。

「ん〜多分」

ちなみに一刀以外の人達はデバイスを展開している。ユーノはフェレットモードになりなのはの肩に乗っている。

「多分つて、平気なのか!？」

「魔界に行かなきゃ平気だよ。ここはまだ、魔界じゃない。ただ人間界でも無い。言うならどっち着かずの世界さ」

「魔界に行ったらどうなるのかしら？」

高町の隣を歩いているリンディが聞く。

「ああ、別に魔界に行ったからつてすぐ死んだりしないよ。なにしろ魔界にも空気はあるし、違う所は人間界と比べると魔力が濃いのと悪魔がいる事かな？まあ魔界に行けば悪魔に襲われて終わりだけだね」

実際はかなり違うが、この男に言わせると魔界も人間界もそんなに変わらないらしい。

「違うない、ね……………」

魔界に近いだけでこの雰囲気なのだ、魔界に行けばどうなるか？

(本当にこの子は何者かしら？見た目はなのはさんとそう変わらないのに)

先頭を歩く少年が、何者なのか……リンデイの中で疑問は大きくなる。その少年は……。 (なんだ？声？呼んでいるのか？いや……助けを求めてる？)

目的地に近づくにつれ大きくなる声に意識を集中していた。

数分後、目的地についたのだろう。少年の足が止まる。

そこには、巨大な石造りの扉があった。良く見れば扉には、複雑な文字が刻まれていた。

「これは？」

珍しいのだろう。

ユーノが扉に近づきながら呟く。

「……………呼んでるな」

顎に手を当て何か確信したかの用に一刀が呟く。

「へ？」

いつの間にか、ユーノの近づくに居た一刀が扉を躊躇わず扉を開け中に飛び込む。

「「「な!?!」」」

あっという間に一刀の姿は扉の中に消えた。

「何を考えている……!」

「落ち着きなさい。一刀さんには何か考えがあるのでしよう。今は

待ちましょう」

「くっ分かりました」

そんなやりとりの間、周りを見回していたのはが気付く。

「ユーノ君がいない!!!」

「え!?!」

――魔界――

魔の森を一人の少年とフェレットが走っていた。一刀とユーノである。扉を開け中に飛び込む時にユーノを巻き込んでいたのである。

「何で、こんな事に?」

ユーノは涙目である。だがしょうがない。何しろ後ろには大量の悪魔が追いかけて来ているのだから。止まれば死まさに命を賭けた鬼ごっこ。

「貴重な体験だろ?」

追い付いてきた悪魔を無名刀で切りながら答える。何故か楽しそうである。

「助けて~~~~」

「ハハハハハハ」

何が楽しいのだろう?

「何でこんな事を!？」

真剣な顔で呟く。

「聞こえたのさ。母を助けてっつてな!！」

「そんな、気のせいじゃないの!!!!!!!!!」

悪魔を切りながら、確信を込め叫ぶ。

「いや違う。俺の勘が告げている。間違いないとな。それに、真剣な声だったんだ。例え違っただとしても確認はしないと」

「うっっ分かったよ」

前方に現れた悪魔を殴り倒しながら、

「安心してよ。魔界に来るのは始めてじゃない。なんかなるさ、多分」

「不安だなっ」

しばらく命を賭けた鬼ごっこを続けると、目の前に巨大な蜘蛛が見えた。その蜘蛛の視線の先に光が見えた。

「あそこだ!！」

無名刀をしまいながら、叫ぶ。

「ええー!!!!!!!!!」

「あいつの向こうだ!!!捕まれ、跳ぶぞ!!!!!!!!!」

言うな否や両足に魔力を込め地面を蹴る。

(ファントムが……………この体じゃ厳しいな。どうするか……………)

ファントムを飛び越えお目当ての物に近付く。

着地の衝撃でユーノが目を回しているが気にせず光に近付く。

光の中は二人の女性が横たわっていた。まあ一人は生体ポットの中だが。

(変だな？悪魔が来ない？)

後ろを見ると悪魔達は光を嫌がるように近いて来ない。

「プレシア・テストロツサ！！！！！！何で魔界に！？」

ユーノ女性を見て叫ぶ。あれだけ走った割には元気である。

「知り合いか？」

女性に近づきな尋ねる。

「色々訳ありで、後で話すよ」

「そうか」

眩きながら光に近付く。もう少しでプレシア達に触れると……

「人間よ。何しに此处に来た？」

ファントムが話しかけてきた。

ファントムの方を見ながら、力を込め言い放つ。

「この人達を助けに」
「何？」

それは予想外の答えだったのだろう。ファントムの声に動揺が出ている。

(何者だ？ただの人間のようだが？)

だが、ただの人間が魔界に来て無事ですむはずがない。ましてや、相手は子供である。下級悪魔でさえ殺せる相手だ。こんな魔界の奥までこれるはずはない。

「ユーノ、とりあえずプレシアさん達を運ぶぞ」

プレシアを肩に担いで生体ポットからアリシアを出しアリシアに自分の着ていたコートをかける。

「分かったよ。でも、どこに行くのさ？周りは悪魔だらけだよ？人を担いで逃げられないよ」

その一言で一刀の顔が曇る。何しろ今の体は子供なのだ。いくら強化しようも大人を担いだ上にさらに子供を担ぐのは、厳しい。

(どうするかな？)

ここで、普通はどちらかを置いて行くのだろうか、この男にはその発想は無いらしい。

「なあ、ファントム。手貸して欲しいんだけど？」

ファントムを見ながら尋ねる。

「「はあ!?!」」

さすがに予想外だったのだろう。ファントムの声に動揺が出ていた。

「何言つてんだよ!悪魔だよ!手を貸してくれる訳ないだろ!!!」

「!?!」
「だがな、ユーノ。彼女達を担いで、悪魔達から逃げ切るのは厳しい。なら手を借りるしか無いじゃないか」

ファントムの複眼を見つめながら尋ねる。

「で?どうする?」

「.....」

(何者だ?この男)

圧倒的な存在感、魔帝とまではいかないが、今で殺してきた人間達とは格が違う。

「小僧、名は?」

目の前の小さく、大きい者に尋ねる。

「北郷 一刀」

「君、凄いね」

ジャエルシードの結界を解除しファントムが近づけるようにし、その背にアリシアの生体ポットを乗せながら眩くやく。ちなみにアリシアは生体ポットに戻した。

「な・に・が!」

無名刀を振るい、青龍を撃ち悪魔を倒しながら答える。

「うん、ごめん。何でないよ……………」

プレシアと生体ポットが落ちないようにチェーンバイントで縛りながら眩く。

「速くしろ!」

魔力の刃を飛ばしながら叫ぶ。

(さすがに数が多い。だが、下級に中級しかいないな。魔界なんだからもっと上のレベルが来ても良いはず)

そんな事を考えていたのがまずかった。ほんの一瞬だが隙が出来てしまう。

「しまっ!」フロストの放った氷の刃が一刀を襲う。

身構えるが、氷の刃は一刀に当たり前に雷のコウモリにあたり砕けた。

「あなた、面白いわね。良いわ、力を貸してあげる」

いつの間にか隣に雷を纏った美人が立っていた。
(ネヴァンか)

古い記憶が蘇る。昔、ダンテが倒した悪魔だ。その後ダンテの武器
になっていた。

だがこちらの方とは、性格が違うようだ。少なくとも人間に力を貸
すような悪魔ではなかった。

「助かる。名前は!？」

さらに二体の悪魔を切り、叫ぶように尋ねる。

「ネヴァンよ！」

こちらも雷を出しながら答える。

「準備出来た!行こう！」

ユーノが叫ぶ。

「遅い!!！」

特大の魔力の刃を真つ正面に放つ。悪魔の壁に穴を開けそこに、ネ
ヴァンの雷とファントムの火球が炸裂する。

「走れ!!!!！」

悪魔達を切り倒しながら来た道を駆ける。

(ちい、数が多いな。しかもちらほら上級が混じってるし)

「遅い！乗れ！！」

ファントムが怒鳴る。

「了解！！」

ファントムの背に括り付けられてるアリシアの生体ポットの上に乗る。ちなみにアリシアは生体ポットの中に戻した。

「朱雀を出して！！」

紅達に朱雀を出してもらい悪魔に向かい乱射する。

（朱雀じゃきついな。よし）

「紅！！後方の空間を焼く！！！！プロミネンス発動！！！！」
「了解」

プロミネンスは広範囲を焼き払う事が出来る魔法である。使う魔力が多いのが欠点だが、魔界なら問題ない。ちなみにデバイスを展開しなくても使える。

「紅炎に焼かれ消える！！」

後方に展開していた悪魔を焼き払う。少なくとも数十体は倒せたはずだ。これでなんとか成るだろ。

さすがファントムと言ったところか……直ぐに最初に魔界に来た場所まで戻ってこれた。

「で？どうやって戻るだい？」

「ああ、それなら簡単だよ。ユーノこれ付けて」

指輪を渡す。

「これは？」

「良いから、それに魔力を込めて」

「うん？わかった」

一刀も無名刀を取り出し魔力を込める。無名刀の刃を魔力が包む。

「はあ！……！！……！！……！！」

無名刀を全力で振るい空間を文字通り切る。

「よし、ユーノ……！！指輪使え……！！」

「わかった……！！」

指輪から強烈な光が溢れその場にいた全員を包む。

「……海鳴市……？……？……」

巨大な扉の前に三人の人間がいた。

「ううゝ遅いよゝユーノ君大丈夫かなあ？」

そう言いながら扉の前をうろろろしているのは、なのはである。
よほど心配なであろう、さつきからずーとこつである。

「大丈夫よ。一刀さんが一緒だもの」

こちらリンディ。どこから出したのか、お茶を飲んでいる。

「ですが、艦長。一刀は子供ですよ？」

イライラしながらクロノが言う。

「うゝん。そうなんだけど、何故かかしら？絶対に大丈夫と思うのよ。不思議ね」

言い終わると同時に扉が開く。

「……な」三人が目にしたのは………でかい蜘蛛に乗った一刀にユーノそしてプレシアにアリシアの生体ポットに明らかに人間じゃない女性だった。

「帰ってきたゝゝ」

「疲れた……………」

一刀とユーノが寝ころびながら呟く。さすがに一刀も疲れたらしい。

「……一刀（さん、君）」

「はい？」

首だけ動かし見る

「説明して(ろ)」

「はい……分かりました」

後に一刀は語る。魔界に行き悪魔の大軍と戦うより怖かったと。

第八話（後書き）

予告は未定。

魔界での事を説明し、アリシアとプレシアについて聞く一刀。

二人のいきさつを聞き何か決意する。

次回、第九話・再生

第九話（前書き）

感想等、待っています。

第九話

魔界から帰還し、プレシア達についての説明をクロノ達から聞いた。もちろん起こした事件の事も……………簡単に説明するとこんな感じ。

P・T事件

ミッドチルダの魔導師プレシア・テストロッサが起こしたジュエルシードを使つての次元災害発生未遂事件。

実行役として活動していたプレシアの娘のフェイト・テストロッサを高町なのはの協力と戦いにより確保。

事件の主犯であるプレシアはアリシアの亡骸とともに行方不明になった。

――クロノside――

説明をしている最中ほんの一瞬、北郷の顔が曇ったが、後はプレシア達を無表情で見つめていた。

「フェイトって子は、どうした？」

視線をプレシア達から外さず、声も淡々としていた。だが……………。

「今は本局で裁判中だよ。僕も証人として出る予定」

フェレット状態でなのはに抱かれているユーノが答える。ユーノはなのはに離して貰えないようだ。魔界から帰還してからののははユーノ離さない。それだけ心配だったのだろう。

「そうか……………」

淡々と北郷が答える。何を考えている？

「リンディさん。ちょっと良いですか？」
「何かしら？」

母さんはアースラと連絡を捕ろうとしているが、繋がらないらしい。

「プレシア達の事を秘密にして欲しい」

「「「え!?!?!」」」

――クロノside終――

「何を考えているんだ!?!無理に決まっているだろ!?!?!?!」

クロノが怒鳴る。なのは達も困惑しているようだ。無理も無い、何しろ行方不明の次元犯罪者が目の前にいるのだ。秘密にしろと言う事は見逃せと言っている事と同じである。

「別に見逃せと言う訳ではない。少しの間、俺に預けて欲しいだけだ」

悪まで、淡々と告げる。だが、無名刀をいつでも抜けるようにしている事から、断ればどうなるかは一目瞭然である。

《どうしよう?》

《無理ね。さすがに》

《何を考えいるんだ!?!コイツは!?!?!?!》

《良いんじゃない?》

ユーノが平然と言い放つ……………念話だが。

「「「ユーノ（君、さん）！？」」「」」

相当驚いたのだろう。念話では無く、しかも思いつ切り叫んでいる。

「いや、断れば一刀だけじゃなく…後ろのファントム達も黙ってないんじゃないかな〜」

後ろでは、主にファントムが事の次第では、容赦しないぞというオラをバンバン出している。

「それに一刀なら、悪い用には成らないよ。逃がしたりもしない」

「ユーノ君……………」

「ずいぶんと信頼しているな？だが、無理な物は「良いでしょう」母さん！？」

「プレシアさん達を助けたのは一刀さんですし、ここは一刀さんに任せましょう」

「すいません。わがまま言って、ファントムプレシア達を運んで欲しいんだ」

言うな否やファントムの背にプレシア達を乗せる。

「ああ、ジュエルシードは全部貰って行くから」

「「「え！？」」「」」

ユーノだけは苦笑している。まあ彼は一刀がジュエルシードを盗るのを見ていた訳で、こうなると思っていたのだろう。

「大丈夫。悪い用にはならいさ。ああ〜そうそう俺の連絡先はユーノに渡しておいたから、困ったことがあれば連絡してよ。じゃあね」

言い切るや、転移魔法を使いどこかに転移する。

「うん、じゃあね」

ユ一ノは手を振っているが、他の人は慌てている。

「さてと、なのは。明日も早いんでしょ？そろそろ帰った方が良いでしょう。クロノ、リンデイさん僕達も一度ミッドチルダに戻りましょう」
「うん……わかったよ」

「そうしましょう。フェイトさんの裁判もあるし何より悪魔について早急に対策を立てないといけないわ」

「確かに、なのはのカードがあればミッドチルダとの行き来は簡単
に出来るし……今は帰ろう」

こうして今日は解散となった。

――海鳴市・海が見える丘――

「マスター。何を使用としているのですか？」

「………アリスアの蘇生かな？」

「出来るのですか!？」

「んゝ全力を尽くすが、何せ死んでる訳だし……まあ、確率は三億
三千万分の一で無理だな」

「無理じゃないですか!?!?!?!?!」

「死んだ人間は生き返らない。それをねじ曲げるんだ。難しいに決

まってるだろ？」

何しろ願いを叶える玉も無いし、百の人間を救う刀も無い。

可能性があるのは魔界の魔力を吸収したジュエルシードか螺旋力ぐらいか……あ！後、はやてにあげようと思ってた、エリクサーに復活の玉があつたな。

この4つの中の内……

「螺旋力は駄目だな」

「は？」

「ん？ああ……こつちの話し」

あいつが使わなかつたんだ……俺が使う訳にはいかないよな。

「なあ、友よ」

脳裏をよぎるは、嘗ての友。戦闘因果に支配された世界に風穴あけた一人の男。

「ふう………よし！可能性を少しでも上げるために！」

「………ために??」「……」

ファントム、ネヴァン、紅、リユーファーが声を揃える。

………ファントム達意外に乗りが良いな。やはりあの世界のファントム達とは、違うな分かつてはいたけど。

「プレシアさんを起こして手伝ってもらおう」

「そういえば、まだ寝ていますね……」

「違うぞ。寝てるんじゃない、仮死状態になってるんだ」

ジュエルシードの力なのか、プレシアさんは一時的な仮死状態にな

――八神家――

夕食後、はやてとヴィータはザフィーラに寄りかかりテレビをシグナムは庭で素振り、シャマルは洗い物をしていた。

「一刀遅いな」

「なんだ？ヴィータ寂しいのか？」

庭で素振りをしていたシグナムが答える。

「ばつ違う！あたしはただ…そのあいつが居ないとはやてが退屈そうだからだな…」

顔が真っ赤である。

「素直でないな」

「本当にね」

「うむ」

「うっせー！！！」

「まあまあ、シグナム達もその辺にしとき。……しかしほんまに一刀遅いな、大丈夫やるか」

時計を見ながら心配そうにはやてが呟く。

「大丈夫でしょう。一刀はあれで強い、それに紅達もいます」

「そうね、紅達もいるし大丈夫でしょう」

「だな」

「うむ」

どうやら一刀より紅達の方が信頼されているらしい。

「でもな〜」

「多少の無茶はするでしょうが、心配は無いでしょう」

その多少の無茶で、魔界に人助けに行く一刀なのだが……

「ん〜せやな〜」

「しかしいくら何でも遅くねえか？」

一刀が出て行ってざっと数時間が立つ。

「む？そう言えばそうだな。……………噂をすれば帰って来たみたいだぞ」

庭に転移魔法が展開され中から……………一刀と巨大な蜘蛛に女性が二人に生体ポットが現れた。

「ん〜やっぱり転移魔法は慣れないな〜。ん？ただいま」

「ただいま、ではない……………!!」

「ぐはあ!？」

シグナムの右ストレートが炸裂する。……………何故？

「痛いじゃないか!!」

「後ろのは何だ……………!!」

ファントム達を指差しシグナムが烈火のごとく怒り、怒鳴る。

マジで怖い……………しかもシグナムの後ろの人達もかなり怖い……………魔界

の方がましだったな~~~~。などと現実逃避をしていると……

「答える!?!?!?!」

「っ……………!?!」

頭に拳骨が落ちる……………強化してないから真面目に痛い。

「はあ〜シグナム殿。主は話せる状態で無いので我らが話そう。ま
ず……………」

……………数時間後……………

はやて達からたっぷりのお説教を受け、ボロボロになった訳ですが
……………さて気分を変えてプレシア達を助けよう。

「シヤマル頼むよ」

「わかつたわ」

シヤマルの回復魔法をプレシアさんに使ってもらおう。

「ん……………」

お、起きたか。

「ここは?…アリシア!?」アリシアさんならそこだよ「アリシア
!?!良かった」

プレシアさんがアリシアさんの生体ポットに駆け寄る。

「ここは？」

「説明するよ。プレシア・テストロッサさん」

「！何故私の名前を？」

「一気に警戒されたな、しかもアリシアさんをかばうか……………うん、絶対に助けよう。」

「説明するからとりあえず家の中に」

「その前に、一つ良いかしら？」

「何？」

少し躊躇った後に……………

「フェイト・テストロッサと言う子がどうなったか教えて」

……………真剣な眼差しだな……………なるほどね。

「その事も含め話すよ。だから中に入って下さい。体にさわります

「よ

……………わかったわ」

……………「大体こんな感じかな？まあ又聞きなんですけど」

俺が説明している間、プレシアさんにはやて達も静かに話しを聞いていた。

「そう……………フェイトは、良い友達に巡り会えたのね……………良かった」

「はい。高町さんは良い子ですよ。他にもフェイトさんの周りの人達は良いばかりです」

「そう…あの子……………」

何か咳いていたが、聞こえなかった。……………いや、聞かないようでした。

「プレシアさん、アリシアさんを助けます。手伝って下さい」

「でも…どうするつもり？」

プレシアさん達にエリクサーを見せる。

「これはエリクサーと言う薬でおそらく体は生き返ります。その後、ジュエルシードを使いアリシアさんの心を…つまり魂を呼び戻して終わりです」

「終わりって……………分かってんのか！？死人を生き返らすんだぞ！！」

ヴィータが掴みかかってくる。禁忌なのは分かっている。

「分かっているよ……………だけど決めたんだ。彼女を生き返らす」

「何故…そこまでしてくれるの？あなたには関係無いじゃない？」
プレシアさんが俺を見ながら呟く。その手が若干震えているのは娘が生きる喜びかそれとも……………。

「それは……………」

「それは？」

うーん…なんと言えば良いのか？ただ助けたいだけなんだけど……。

「要するに、一刀が助けたいんやろ？それでええやん」

はやて、よく分かっている。

「まあ、そう言う訳だ。さっさとやろうか」

準備はとうに終わってる。

「プレシアさん手伝ってもらいたいのですが？」

「え？ええ、わかったわ。私に出来ることなら」

「大丈夫できます。今からジュエルシードに俺の魔力を注ぎます。その時暴走しないようにサポートしてください。そしてここからが重要です。まずアリシアさんを明確にイメージしてください」

「イメージ？」

お？よく分かってないな…俺の説明不足が悪いんだがな。

「良いですか？まずアリシアさんの体を生き返らせます。ですが体だけなんです。完全に生き返るには魂も必要なんです」

「それは分かったわ。でもイメージって？」

「魂を呼び戻すにはジュエルシードを使います。ですが、はっきり言って特定の個人の魂を呼び戻すのは不可能に近い。そこでプレシアさんのアリシアさんへの想いに賭けてみようと思ひまして」

「想い？」

「ええ。とにかく強く明確にアリシアさんをイメージしてください。なんでも良いです。なにが好きで嫌いか、将来の夢はなど、そして

もう一度合いたいと強く想ってください。そうすれば後は俺がやります。良いですね？いきますよ」

意識を切り替え魔力を体に満たす。

魔界に行ったおかげで魔力が体に満ちているし何よりやる気が限界突破だ。今なら不可能も可能にできる。

「わかったわ」

すでに体は治っている。後は魂だけ。

ジュエルシードにありったけの魔力を注ぐ。

(世界は人の想いで無限に広がる。つまり無限の可能性がある訳だ。ならこれだけの魔力にプレシアさんの想い………奇跡だって起こせるさ)

ありったけの魔力と想いを注ぐ。アリシアさんの魂に届くように。

「アリシア」

プレシアさんが呟く。

「一刀頑張つて」

「一刀!!!」

「根性見せる!!!」

「頑張つて!!!」

「お前なら出来る」

はやて、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラがそれぞれ応援してくれる。

心強いな。なら答えない訳にはいかないな。

――ファントムside――

生まれて数千が過ぎたが、目の前の光景ほど意識を引きつけられた事は無い。

(目が離せん。北郷一刀…貴様は一体？)

これほどの力を持つ悪魔は魔界にもそうはいない。そして何より、悪魔が持つ力とは明らかに違う。

それは弱肉強食の魔界で生きてきたファントムやネヴァンにとって始めての経験だった。

(そうか……………相手を殺すためでは、無く。助けるために自分の限界をも越える。これが人の強さか……………ふっこれはかなわん)

今思えば魔界で彼女たちを見ていた理由は、プレシアが大事そうにアリシアの生体ポットに寄りそって居たからだ。

それだけ魔界では、悪魔同士の殺し合いが絶えなかった。

(簡単な事なのにな)

気づけば簡単な事なのだ……………言葉にすれば、たったの一言。

それが悪魔には、分からない。

そして少なくとも北郷は分かっているのだろう。

ファントムの複眼が北郷を見つめる。彼が起こす奇跡を見逃さないように……………そしてその瞬間はやってくる。

――ファントムside終――

アリシアの目が薄くだが確かに開く。何かを探すかのように視線がさまよいそして……………プレシアを見つけると……………。

「お母さん？」

プレシアの顔に手を伸ばし触れる。

「アリシア……………！」

本来なら、二度と合う事の無い親子は、その存在を確かめ合うかのように抱き合う。

少し離れた場所で……………

「お疲れさま。一刀」

「ん？ありがとう。はや」

「へーきなのかよ？」

「へーきだよ。ヴィータ。ただ疲れたから寝る」

「つて……………此処でかよ……………！」

「ちゃんと布団で寝ろ……………！」

「良いだろ？シグナム？」

「良くない……………！」

こうして、俺の長い1日が終わった。

第九話（後書き）

次回は日常編を少し。

第十話（前書き）

大学の友達、五人と旅行に行ってきました。
楽しい旅行でしたが………まさかあんな事になるとは………。

第十話

プレシア達が八神家に来てから3日が過ぎた。

その間に一刀は、はやてとプレシアの体の治療のために使えそうな魔道具や薬をシャマルに渡し、自分はシグナム達と共に悪魔の調査や討伐、次元管理局からもらった指名手配書の犯人を捕まえてリンカーコアを奪い取っ………もらうといった事を繰り返していた。もちろん悪魔からもリンカーコアは奪っていた。リンカーコアを奪われた悪魔はかなり弱くなり、一刀曰く「楽が出来て良い」との事。もちろんはやてには許可を貰っている。その時の光景はこちら。

――アリシア蘇生・1日後――

「闇の書の蒐集をする」

起きてそうそうに一刀が宣言する。

「……………はあ!?!」「……………」

はやて達は声を揃えて叫ぶがプレシア達は何の事なのか分からず首を捻っている。

「ちよっ一刀、蒐集はアカンって「それは他人に迷惑が掛かるからだよな?」そっや。他人に迷惑をかけられんやろ?」
「これ見て」

言つとテーブルの上に辞書並みの厚さの紙の束を乗せる。

「これは？」

「次元管理局から貰つて来た次元犯罪者の手配書」

「これがなんだ？」

「こいつらは、賞金が掛けられている」

「まさか……………」

シグナム達も一刀が考えている事に気づいたらしく顔が引きつっている。

そんな中、素晴らしい笑顔で一刀が予想通りの言葉を口にする。

「他人に迷惑を掛けているんだ。こいつらを捕まえて賞金を貰いついでにリンカーコアも蒐集する」

さすがに予想通りとは言え茫然とするはやて達。

「あれ？何か変な事言つた？あ！後悪魔からも貰つつもりだから」

悪魔達にもリンカーコアが存在するのは確認済みだ。

(そろそろはやての体も限界が近い。闇の書の修正案は出来た……………後は管制人格に手伝つてもらえば……………)

「良いよな？はやてなににしる悪魔とは戦わないといけない訳出し、手配書の奴らもほっとけ無いだろ？リンカーコア取っても死なないし、楽に捕まえる事が出来る」

「う……………」

その後、一刀の説得により、条件ありで闇の書の蒐集を始める事に

なった。

後にはやて達は語る。この時の北郷一刀は実に生き生きとしていた
こと……………。

時は戻り

——海鳴市・悪魔が出た公園——

「悪魔があふれる町……………海鳴市」

「アホ言ってるじゃねえ」

ドゴォ

「ぐはっ」

ヴィータのツッコミと共に繰り出されたデバイス「グラーファイゼン」が一刀の後頭部に炸裂した。

「ヴィータさん。ツッコミは有り難いですが、手加減して下さい」

「うるせーアホ言ってるからだ。」

地面に突っ伏し涙声で一刀が言うのに対しヴィータはデバイスを担ぎながら呆れた顔で答える。

「はあー。お前たち、じゃれてないで真面目にやれ」

「いや、一刀が「うるさい」む」

シグナムがヴィータに説教をしている間に復活した一刀がはやてに連絡を取っていた。

「もしもし〜はやて〜聞こえる？」

『聞こえとるよ』

「こっちは片付いた。ファントム達の方は？」

『ファントム達なら、もう帰ってきとるよ』

「そう。こっちも今から帰るから」

『はいよ〜気いつけてな』

はやては自宅で一刀が作った地図を見ながら悪魔の出現地などを教え一刀達のサポートをしている。

一刀も広域探査は出来るがはやても何かしたいとの事なのでサポート役を任じた。

はやてが使っている地図だが、悪魔の出現した場所や強力な魔力に反応しまるでリーダーのように使う事が出来る。

一刀に言わせるとナビいらずの地図。余談だがプレシアはこの地図を作れるのに回復魔法が使えない一刀の事を不思議なものを見るような目で見ていた。

「しかし、多くないか？」

「悪魔か、リンカーコアの募集もでき助かっているんだがな」

「でも、このままじゃいつか人が襲われるぞ」

「ん〜多分大丈夫だとは思うよ」

「何？どう言い事だ」

「ちよつと見て」

少し考えてから一刀が地図を出す。

「これが今まで悪魔が出現した場所」

地図の上に赤い記しをつけていく。

「これが？」

「何だつてんだ？」

さらに記しをつけていく。

そして今度は青で線を引いていく。

「青い線は俺の結界ね」

青い線はほぼ海鳴市を囲んでいる。

「で、緑の線ははやての行動範囲に貼ってある結界ね」

こちらははやての行動範囲を覆っている。

「青と緑の違いは？」

「青い方は、簡単に言つとトリモチかな？誘いこんで閉じこめる。で、緑の方は完全防御の結界。核ミサイルまでなら防ぐぞ」

「核ミサイル……………」

「一刀は何からはやてを守りたいのだろうか…………シグナム達は疑問に思ったが恐いのでやめた。」

「さてと……………こんなもんか。見てよ」

「「な!？」」

悪魔を記す赤い点は、全て青い線と緑の線の境界線ギリギリに集中していた。

「確信は無かつただけど……………間違い無いね。……………悪魔達は闇の書を狙ってる」

険しい表情で一刀が言い終わると同時にシグナムが一刀の首を絞める。

「何故だ！？何故悪魔が闇の書を狙う!？」

「シグナム？一刀、それじゃ喋れないから」

それを見ながらヴィータが呆れたようにシグナムに言う。

「む？すまん」

言うつと手を離す。

ドサツと一刀が地面に落ちる……………顔が青い。

「あの…ね…………魔界と人間界の行き来は難しいって言ったよね？」

「ああ、それが？」

「雑魚は次元の隙間からこちらにこれるけど、大物が通れる程の隙間はそうない」

フロントムやネヴァンは大物だが魔界門（今命名）を通りこちらに来た。

その時にその門は一刀が破壊した為もう無い。

「ああ、だから雑魚しかこれ無いんだよね？」

「だから、それが一体なんだと……………まさか……………」

シグナムは気づいたようだ。

「仮説だけど闇の書の魔力を使って次元の歪みを作る気なんだと思う。フロントム達に聞いたけど魔界門はもう無いって言ってたし」

大きな隙間が無いなら作れば良い。

その方法は分からないが闇の書が鍵になるのだろう。

何しろ魔帝の事だ非道な方法なのは間違いない。

いくら闇の書が持ち主にしか使えないとは言え安心は出来ない。

「そうか……………この事は主はやてには伝えないでおこう。無駄に怖がらせたくはない。何しろ、主はやてはしっかりした方だが……………まだ子供だ」

シグナムが一刀達を見ながら言う。

「異議なし」

「わかった」

言い終わると同時一刀が刀を抜き、シグナムの後方に魔力刃を飛ばす。

「何時まで見ている？覗きは良くないな」

「いつから気づいていた」

シグナムの後から仮面を付けた男が現れた。

「「な!？」」

どうやらシグナムとヴィータは気づいて無かったようだ。

それも無理は無いだろう。

一刀ですら心配しか感じ無かったのだ。しかも自分の結界の中でだ。
(はあ~~~~しばらくサボってたからな)

軽く自己嫌悪になり、落ち込んでいる一刀の事を無視し、シグナムとヴィータがデバイスを展開し仮面の男に今にも襲い掛かるとして

いた。

「て……………シグナム！ヴィータ！ちよつとたんま！！その女の人には話が有るから、デバイスを引っ込めて！！！」
「ちつ！！」

シグナム達は殺気を出しつつ、デバイスをしまう。

仮面の男は内心ほつとしながら、一刀が言った一言に驚愕していた。

（なぜ、女だと分かった！？変身魔法を使ってるのに！？）

「ああ、我が主は極度の女たらし故、直感で女かどうか分かるのですよ」

リユーファーが仮面の男？の心を読み答える。

一刀には面白い玩具を見つけたような笑顔をした星の姿が見えた。そして目の前には二人の夜叉。

「一刀少し話がある」

シグナムとヴィータの目が単色になっている。

「マスター話があります」

「……………」

紅、ゼフィ。

訂正二人では無く 四人だった。

「「「仮面！！！！！！」」」

「はいいいい！！！！！！」

仮面の男？はよほど恐ろしいのか、声が裏返っている。

「「「少し話をするので、ちょっと待っている。逃げたらクロス」」」

悪魔も裸足で逃げ出すほどの殺気。

今の彼女達なら魔帝をも倒せそうだ。

「仮面さん！！助け」「良いからこい！！！！！！」「嫌ああ
あ—————」

—————三十分後—————

「で、話と云うのは手を貸して欲しいと思ひまして」

ボロボロのぐちゃぐちゃになった一刀が車椅子に乗りながら仮面の男？に提案する。

「はあ。あの体は大丈夫なのか？」

「大丈夫です。慣れました」

「そうですか……………」

どうしたらそんなボロボロになることに慣れるのだろう。

仮面の男？は聞いたかったが、恐いのでやめた。

「まあ、その前にあなたの後ろにいる人と話がしたいんですがね。

良いですよね？」（良く言う。断れば切ると顔に書いてある）

この子供は何ものだ？
悪魔を圧倒的な力で倒したかと思えば彼女達にボロボロにされる。
そして、この殺気に存在感。
もうつかみ所が無いなどの話では無い。
訳の分からない、まるでに雲のような子供だ。

(もし断つても無駄なのだろう。きっと全てお見通し……………か)

これは勘違いなのだが。この時の一刀はただ単純に管理局に用事があり、ついでに会って協力して貰おうと思っただけだった。
さらに顔は包帯でぐるぐる巻きにされているために表情は見えず、そして殺気は一刀の首に掛かっている紅が出しているものだ。
別に一刀自信は断られても良いと思っただけ。一言で言えば仮面の男？の勘違いなのだが……………まあ、正常な判断力はシグナム達が一刀をボロボロのぐちゃぐちゃにしているのを見ている間に失われていた。

「分かった。ならば早い方が良い。明日にでも管理局に「分かったはやー！」

「もとも明日は管理局に行くつもりだったからね」

「そうか、では明日」

仮面の男？が転移魔法を使い消える。

「管理局に何の用だ？」

「これからの事を聞きにね、後はプレシアさんが自首するから付き添いかな？プレシアさんの娘にも会って見たいしね」

プレシアの娘「フェイト」。

彼女の裁判が始まると知りプレシアが一刀に管理局に自首すると言

ってきた。

そのために管理局に連れて行って欲しいと。

一刀に断る理由も無く、むしろ管理局の悪魔に対する対応や闇の書の事もありその内に顔を出そうと思っていた矢先の事だった。

そして明日、プレシアとなのはと一緒に管理局に行く予定になっていたのだ。

「アリシアはどうするんだ？一緒に連れて行くのか？」

「アリシアは、ちょっとね……………一応死人だった訳だし…もうしばらくははやての家で面倒を見て貰う事になるかな？」

「そうか、主はやても喜ぶ」

はやてとアリシアは、まるで姉妹のように仲が良い。

一刀達にしてもはやてに友達が出来たのは嬉しくプレシアにしてもアリシアに寂しい思いをさせずにすむので、助かっている。

「さて、想わぬ事で時間を喰ってしまったし、はやく帰ろうか」

「ああ」

「そうだな」

（さて、帰ると言うてからすでに三十分以上経っているの訳なのですが…………これは面白い事になりそうですね〜）

転移魔法を使い八神家に帰り、ドアを開けた瞬間。

「…………遅い……………」

一刀達はこの後、リユーフアーの予想通りはやて達からお話があった。

「…………ごめんなさい……………」

一刀の気持ちがいさ分かった、シグナムとヴィータだった。

第十話（後書き）

次回フェイトが登場します。

十一話（前書き）

今回は恋姫のキャラが登場します。

十一話

時は遡り北郷一刀がはやてを説得している頃。

――桜台・登山道――

「えーと……………」

朝、日頃の日課である魔法の練習に来たなのは目の前で、二人の少女が互いの武器をぶつけ合っていた。

片や、金属製の棍棒。

片や、槍。

だが、どちらも子供が持つてる物ではない。特に棍棒を使っている子は自身の体重を超える物を振り回している。仮に棍棒が張りぼてだったとしたら……………。

「ふん!!」

「べえ〜だ。当たらないよ〜だ」

ズドオン。

こんな音と共に地面が陥没したりはしないだろう。

「ユーノ君? どうしよう?」

「僕に聞かれても……………とりあえず話を聞いた方が良いと思うよ」

あの後、フェイトの裁判までしばらくあるので、ユーノはなのはの家に泊まっていた。

「でも……………」

ズドオン、ズドオン、ズドオオオン
轟音と共に地面が陥没する。

「……………しばらく様子を見よう。お腹が減ったら止めると思っ
よ」

「ユーノ君……………なんか一刀君と会ってから変わったね」

目の前の光景を見ても落ちついていてユーノに疑問を持つなのは。
ユーノにしてみれば一刀と共に魔界に行ったりした訳で、その時の
光景に比べ目の前の光景は驚きはするが、それだけだ。

「「一刀!?!」」

「ふえ!?!」

突然争っていた二人がなのはに詰め寄る。
二人も目が怖い。

「あなた!!!北郷一刀を知ってるの!?!」

なのはより年は下に見える女の子が聞いてくる。

「え?」

「北郷一刀なら知ってますよ」

なのはの肩に乗っているユーノが答える。

「「喋った!?!」」

驚いたようで、それぞれの得物をなのは、正確には肩のユーノに向

ける。

「うわ、危ないじゃないですか!!!」

なのはの肩から飛び降りたユーノが叫ぶ。

「あ、すまん」

「ごめんなさい」

それぞれ得物を下げ謝る。

「それで一刀の事でしたね？」

「そうだ、お館を探している」

「「お館？」」

なのはとユーノの頭に？が浮かぶ。

「北郷一刀の事だ」

「「はあ」」

「そんなことより、今何処にいる？」

「居場所は分かりませんが……………連絡してみます」

ユーノが通信魔法を使う。

「……………繋がないな？」

この時、一刀ははやての説得に忙しく、通信に出ている暇がなかった。

さらにこの後も不運が重なり結局一刀が時空管理局に行くこと連絡をして来るまで連絡が取れないのだった。

「どうした？」

「一刀君に連絡が付かないの」

ユーノの様子から事態を察したなのはが答える。

「そうか……………参ったな」

「うん、桃香様達ともはぐれちゃたしね〜」

二人の困っている姿を見てなのはが提案する。

「それなら、私の家に来ない？」

「えっ？」

ユーノは分かったたていた用で苦笑？している。フェレットモードなので表情がわからない。

「良いの？」

「うん」

「そうか助かる。私の名前は「真名だよ」分かってる！………
焰耶という」

「私の名前はたんぼぼって言うの。あなた達は？」

なのはと同じぐらいの身長で棍棒を持っている方が焰耶。

槍を持ちなのはより年下に見える方がたんぼぼと言っらしい。

「高町なのはです。この子が」

「ユーノ・スクライアです」

お互いに自己紹介をすませる。

「よろしくね」

「よろしく」

「じゃあ、私の家に行こう」

時は少し進み。

――八神家・庭――

プレシアは迷っていた。もう一人の娘フェイトの事である。自分の身勝手により傷付けたもう一人の自分の子。

(私は、何時も気付くのが遅いのよね……)

思えば何時も間に合わない。アリシアにしてもフェイトにしても……

……フェイトの裁判が近い事を一刀から聞いた。

その時からある衝動に駆られているのだが、いまいち行動に移せない。

理由は二つ。

一つはアリシアの事である。今まで寂しい思いをさせてきた……

もう二度と会う事の出来ない筈だった大事な娘。

もう一つは一刀達の事だ。自分達を危険を犯してまで助けてくれた。

さらにアリシアまで行き返させてくれたのだ。

プレシアに取って一刀は大切な恩人なのだ。

さらにはやて、身分も分からない自分達を受け入れてくれた。彼女の存在はアリシアにとってもプレシアにとっても大切な存在に成っていた。

その大切な恩人達が悪魔や闇の書などの厄介事に巻き込まれている。それを分かっているので、自分のわがままで迷惑を掛けたく無かった。

(どうしたら良いの?.....)

ついため息を吐いてしまう。

「 どうかしました? 」

「 きゃあ!? 」

何処からともなく現れた一刀に驚き、変な声が出た。

「 そんなに驚かなくても..... 」

若干落ち込みながら一刀が小さな声で呟く。小さな声なのは深夜だからか。

「 」「ごめんなさい。気配が無かったから 」

と言うより、自然すぎて分からなかった。

(本当に自然すぎるのよ。まるで世界の一部のようだわ)

そこに有るのが当たり前みたいなの、そんな錯覚を覚える。

それでいて巨大な存在感を出すのだから、不思議な子供だとプレシ
アは思う。

「 はあ、で? どうしました? 」

「 いえ、別に何にも「ああ、フェイトさんの事ですね」え!? 」

どうやら一刀にはお見通しだったらしい。まあ、一刀もだてに様々な経験を積んだわけではない。

「参ったわ。お見通しって訳ね」

まるで降参といった感じにプレシアが手を上げながら答える。

「確か裁判が近いはず………良いんですか？」

一刀の目がこのままで良いのかとプレシアに問い掛ける。

「……………」

プレシアは答える事が出来ない。口を開けば本音が出そうで怖かったからだ。

「二日以内に答えを下さい」

「え？」

一刀は笑顔を浮かべながら、プレシアに言う。

「俺達の事なら心配は要りません。元々、プレシアさん達を巻き込むつもりも無かった訳ですし」「え？」

何度目になるのか、驚きの声を上げる。

「ですから、プレシアさん達を悪魔や闇の書の事に巻き込むつもりは無いんです」

一刀としては、プレシア達を助けたのは魔界門の破壊のついで、さらにアリシアを生き返らせたのは、自分が助けたかったから。故に、プレシア達が手伝ってくれたら、良いぐらいにしか思っていなかった。

そもそも一刀は人助けをしても見返りを求める事は無い。だから便

利屋時代に金欠だったのだが……………。

「ま、俺も時空管理局に行くつもりなんで、早い内に答えを……………
……ああ、後まだ終わって無いですよ？」
「！」

心を読まれ内心焦っていると、一刀の胸元の紅が

「口に出てました」

「……………」

これは意外に恥ずかしい。良く考えれば、自分の娘と歳の変わらない子供に内心を悟られ、背中まで押された訳だ。

(どつちが子供か分からないわね……………)

「じゃあ、俺はこれで。お休みなさい」

言い、一刀は部屋に戻る。

一人残ったプレシアを月が見ていた。

——時空管理局に行く日——

結果、プレシアは時空管理局に自首することに成った。

この事を一刀達に告げた時に一悶着あったが、一刀とはやての鶴の
一声で治まった。

「じゃあ、行ってくるから」

「きーつけてな」

八神家の玄関で一刀とプレシアの見送りをはやて達がしていた。

「俺達より、はやて達の方が危ないんだからな。一応リユーフアーを連絡用に置いていくから。何か合ったら連絡して」

悪魔達の出現率はここ数日で上がっている。

中には中級も混ざってきている。シグナム達が負けるとは思わないが用心に越したことはない。

「我々がいる。心配は無い。一刀こそ気をつける。お前は変な癖があるからな」

「癖？」

それは初耳だった。確かに自分の剣術には癖は有るが、それは刀の性質上仕方の無い物のばずだ。別に変な癖は無いと思っていたが……シグナムには何か分かっているのだろうか？

「……………あ……………」

はやて達には、分かったらしく頷いている。

(え……………はやてとアリシアまで分かったの?)

本当にわからない。何しろはやてとアリシアに剣術が分かるとは……………。

「分からないのか？」

「はい、何でしょぅ？」

本気で分からない。

「まあ、癖と言うより病気ですな。我らも苦労させられました」

「そうだな……………色々な事があった」

過去を懐かしむ用に紅達が話だす。

君達とはそんなに長いつき合いでは無いと思うが？……………と言
うか癖の次は病気ですか……………そうですか。

「敵の武将の娘を客人扱いしたり、敵の武将を仲間にしたたり、敵の
武将を口説いたり、女と見れば口説いたり、ああ！！弱いのに戦場
に出たり、後は政務をサボったり……………」

「その辺にしてください。過去をバラすのは構わないのですが、今
は辞めて下さい」

紅の話に涙が出てくる。……………別に過去をバラすのは構わないが
何故知っている。

大体、五、六年前の話だぞ。

「……………ほう？」「……………」

「ひい！！」

はやて、シグナム、ヴィータ、シャマル、アリシアが殺気のコもつ
た目で睨んでくる。……………はやてとアリシアの殺気も歴戦の将
に勝るとも劣らない。

「そ、それじゃあ行って来まーす」

「……………あ、逃げた！！」「……………」

プレシアの手を取り素早く、転移魔法を使う。

逃げ足には、自信がある一刀だった。

余談だが、結局一刀は自分の癖……いや、病気について分からなかった。この場に華陀が居たらこう言うだろ。『お人好し病』と……。

――

場所は変わって高町なのはとの待ち合わせ場所。一刀との約束の時間の少し前だが、一人の少年と三人の少女が既にその場にいた。なのは達である。ユーノはフェレットでは無く、珍しく人間モードだ。

ユーノが人間だっと思った時の焰耶とたんぼぼはそれは驚いていた。

「遅い!!」

さっきからうるうるしている焰耶が叫ぶ。焰耶達が来てから、五分も経ってないのだが……堪え性がない。

「うるさい!!!」

「あんたがうるさい」

ついにたんぼぼが焰耶につっこむ。たんぼぼも焰耶の気持ちは分かる。何しろ行方不明の大切な人に会えるかもしれないのだ。

だが、いくら行方不明と言ってもまだ一週間も経ってないのだ。そんなに焦る必要は無いと思う。官るも無事と言っていたし、何より今は星お姉様達が付いているはずだ。

何にしても自分達の主である北郷一刀は自分達の常識では測れない。自分達の世界に居た時もたびたび行方不明になり愛紗が血眼に成って探したりしたのだ。

故に焦ってもしょうがないとたんぼぼは思っていた。

「だが……………」

「そんなに心配しなくても、ご主人様は来るから。ユーノさんと約束してるんでしょ？」

「うん、約束の時間までまだ有るけどね」

「なら、大丈夫」

北郷一刀は大事な約束は絶対に破らない。あれはそうゆう男だ。

例えどんな無茶な約束だろうとそれが大事な約束なら死んでも守るだろう。実際にその無茶を何度も見て来たのだから。

そんな北郷一刀だからこそたんぼ達が主人と愛しい人と呼ぶのだから。

「お？来たみたいだね」

登山道を歩いてくる一刀とプレシアの姿が見えた。どうやら途中までは転移魔法で来た用だが、どこから来たのかばれないように歩いて来たみたいだ。

向こうもこちらに気付いたらしく一刀が驚愕しているのが遠目にも分かる。

「焰耶にたんぼぽか？……………その格好は一体？」

「そう言う、お館も子供じゃないか」

確かに一刀も焰耶達も子供の姿に成っている。一刀の場合は月見のせいだが、焰耶達は世界の修正力の影響なのだが、この時の一刀達は知る由もない。

「まあ……………色々あってね……………。何にしても、久しぶり。焰耶、たんぼぽまた会えて嬉しいよ」

その後、お互いに再開を喜んだ訳だが………時間も無いし、焰耶達も桃香達がそろつまでは、真の再開とは言えないらしく、とりあえず時空管理局に行く事に成った。

――時空管理局本局――

フェイトの裁判も時間は掛かるが順調で、クロノも悪魔達の事に集中出来ていた。

だが、やはり管理局の対応は遅いらしく、悪魔対策はほぼ進んでいなかった。

何しろ、地球に出た悪魔は一刀達が倒しているが、ミッドチルダに出た悪魔は管理局が倒さなければ成らないのだが、一体倒すのも一苦労なのだ。

まあ、悪魔達は基本的には人間より魔力が強い。魔法に頼っている魔導師達に取っては天敵みたいな物だろう。実際にシャドウなどの悪魔には、魔法が効かない。

(はあ、管理局の対応は遅すぎる)

地球と違い、既に死者が出ている。だと言つのに明確な対応策が出ていないのだ。

だから一刀の存在には助かっている。

悪魔に対する豊富な知識に、あの戦闘力。はっきり言ってクロノは一刀を時空管理局に入れたいと思っていた。

「クロノ君」

「エイミィどうした？」

「そろそろなのはちゃん達が来る時間だよ」

「そうか、わかった」

一刀達を迎えに、部屋から出た行くクロノ。

この後まさかプレシアが自首して来るとは思っていなかった彼は、プレシアの姿を見てももの凄く驚いていた。

「……アースラ・フェイトの部屋……」

裁判までのまだ時間があるので、フェイトは部屋で待機をしていた。アルフも一緒だ。

「クロノ、どうしたんだろ？もう時間なのに？」

そろそろ裁判所に向かわないといけない時間だ。だがクロノが来る気配は無い。

「寝坊でもしてるんじゃない？」

「アルフ、クロノに限ってそれはないよ」

しかし遅い。何か問題でもあったのか？

フェイトが心配をしていると

「すまない。遅れた」

クロノがやって来た。

後ろに見たことのない人の良さそうな少年がいる。

「早速だが、フェイト。君の無罪が決まった。条件付だけどね」
「え？なんで!?!」

いくら何でも早過ぎる。何しろまだ裁判中なのだ。
疑問を持つのは、当たり前だろう。

「プレシア・テストロッサが自首して来た」
「「え!?!」」

思考が止まる。クロノは一体何を言っているのだろう。母さんは死んだはず。

「さらにアリシアも生き返ってるよ」

見知らぬ少年が言う。

「な、どう言う事だい!?!」

アルフが少年につかみかかる。

「あ~~~~話せば長いのですがつまり……………」

三十分後

「そう、良かった」

やはりプレシアが生きていた事が嬉しいらしく、フェイトの目に涙

が光っていた。
アルフは納得していないみたいだが。

「プレシアの証言と一刀の出した条件で、フェイト、君の無罪が決まったんだ」

特に一刀の交渉が効いた。悪魔に付いての情報を渡すかわりに、フェイトとプレシアの罪を軽くしろと要求したのだ。

「さすがにプレシアは無罪とは成らないが、それでもかなり軽い罪になる。それにプレシア自身管理局に協力すると言っているから、これなら短期間の拘留ですむ」

今の管理局は何より人手が欲しい。

特に優秀な魔導師に悪魔に詳しい人材は喉から手が出るほど欲しかった。

「それでフェイトさん。あなたはどうします？」「一刀さん。あなたの手伝いをさせて下さい。お願いします」

頭を下げ頼む。

母さんを助けてくれたのだ。

彼のために何かしたかった。

「えーと」

(この子、多分なにも言っても聞かないな。なんかそんな気がする)

自分も似たようなものだが自覚の無い一刀だった。

「わかったよ。その代わりに、無茶はしないこと良いね？後俺の事は

「一刀で良いから」

「じゃあ私の事はフェイトと呼んで下さい。一刀」

「わかったよ。フェイト」

名前を呼ぶ。

なのはに教わったのだ、友達に成りたいのなら、名前を呼んでと。

「そっちの人は？」

「アルフ」

「よろしくね。アルフ」

アルフはかなり一刀を警戒しているようだ。
まあしょうがないと一刀は割り切っている。

(敵意を持たれるのは慣れている)

思っていて、涙が出そうだった。

まあ相手がどう思おうが一刀には関係ない。何しろ一刀に取ってはフェイトもアルフも大切な人になるのだから。

「さて、これからの事をみんなで相談しますか」

言いながら、一刀が立ち上がる。

(そう言えば仮面の男？の主人と会う約束だったな……………後で良いや。)

何しろ時間を指定されてはいない。ならば、今は今後の方針を決めるのが先だろう。

(時空管理局は………多分何も対策立ってないだろうしな)

これも経験からの予想だが、まさにその通りだった。
やる事は山済みだ。

こう言う時やる事は一つ。

「出来ることから始めよう」

「何か言った？」

フェイトが尋ねてくる。

「ん？ああ、何でもないよ」

そう言い、みんなと合流するために一度食堂に行こうとする。
食堂で合流後、リンディさんの部屋で話し合いをする予定になっている。
いる。

なお、フェイトはなのはが来ているとは思っていなかったようで、
食堂でなのはを見た時に驚いていた。

その後、お互いに感極まったらしく抱き合っ泣いていた。

「ユーノ」

「何？」

「これ」

そう言って自家製の魔具を渡す。

これは、防御系の魔法をサポートしてくれる物だ。
形は指輪にしてある。

「何かあったら、なのはを守ってやれよ」

「わかってるよ」

なのはとフェイトが落ち着くまでしばらく掛かった。

十一話（後書き）

次回予告 予告と変わる事があります。

リンディ達とこれからの事を話し合っていた一刀達に悪魔が出たとの知らせが、現場に駆けつけた一刀達が見た物は……………

第十二話・勇気

悪魔と戦う上でそれが一番の武器になる。

拠点・シグナム(前書き)

番外編みたいな物です。

拠点・シグナム

――シグナムside――

今日は私が非常勤で働いている剣道場に一刀が遊びに来ていた。しかし、あそこまで目をキラキラさせるとは、まるで子供だな……いや、子供か。

「一刀。やりたいなら、防具を借りてきてやるうか？」

「本当！？お願い」

「うむ、少し待っている」

この前の模擬戦は心躍る物だった。

剣道でも良い勝負が出来そうだな。

………最初の模擬戦の次の日からほぼ毎日、模擬戦を一刀とやっているのだが、足りないらしい。さすが戦闘狂。

「一刀借りてきたぞ。手拭いは私の予備を貸してやるう」

「ありがとう。懐かしいな、久しぶりの剣道だ」

「ほう、剣道の心得が有るのか」

確かに一刀の戦闘スタイルは、刀や剣を使うものが多いが、型と呼ばれる物が無い。

剣道をやっていれば、何かしらの流派の型が身に付くはずだ。

「ん~~~~昔ね」

「そうか」

本当に謎な男だ。

何しろこの若さで百戦錬磨の戦士の目をしている。
かと思えば、主はやてに勝るとも劣らない優しさを持っている。

(本当に何者だ)

一刀については、模擬戦の後に聞いた……………だが謎は残る。

「やっぱ、袴じゃないから違和感があるな〜」

言うと、素振りを始める。

(剣の筋は悪くない。磨けば、良いところまで行くだろう)

だが、あくまでも良いところまで……………あの戦闘力の説明がつかない。

(いや、一つだけあるな)

強くならなければ、ならない理由があったか……………一刀の場合は誰かを護るためだろうな。

「シグナム？」

「ん？あ、ああ何だ」

いかん、考え事に集中してしまった。

「どうした？」

「いや、せつかくだし一本やろう」

剣道の試合か。

「分かった。良いだろ」

「本当！！ありがとう！！」

こうゆう所は、子供なのだがな。

「手加減せんぞ？」

「え？」

「すまないが、審判をしてくれ」

「はい！！わかりました」

手近の練習生に審判をお願いする。

「一本勝負、始め！！」

審判の掛け声と共に一刀が踏み込んでくる。
さすがに速い、だが。

「ふっ」

「うお！！」カウンターで出した突きを竹刀の柄で防ぎ一刀が後方に下がる。

「シグナム！！突きは無しだろ！！」

剣道の試合で突きは高校生まで、禁止になっている。だって危ないし。

「お前には、有りだ」

「なにそれ！！」

この間も、竹刀の打ち合いを続けている。

(なるほど、戦いになれば、剣道の腕など関係ないか)

一刀の強さは、使える物は何でも使うという所にある。剣の振り方、足捌き、間合いの取り方など、自分に有利に成るように使う。

(攻め難い)

だが……普通の模擬戦も楽しいが、こついうのも、有りだな。

「おい、シグナム先生と戦ってるの誰？」

「シグナム先生の知り合いらしいよ」

「凄いな、二人も」

練習生達が騒がしくなる。

一刀の動きも悪くなってきたな。

「一刀。次で決めるぞ」

「分かった」

一旦、距離を取る。

「「はあ!」「」」

お互いに渾身の一撃を放つ。

「引き分け……か」

「そうだね」

私の面と一刀の胴への一撃は、ほぼ同時に入った。
どちらが先か……審判を見るが、首を振っている。

「「ありがとうございます！」「」

お互いに礼をし、防具を外す。

「ふう、一刀」

「何？」

「この後、どうする？もう少して道場も終わるが？」

「んんん外で終わるの待ってるよ」

「そうか、分かった。終わったら迎えに行こう」

「よろしく」

言つと一刀が道場を出て行く。

ほう、ちゃんと挨拶はしていくか。

「さて、練習を再開しようか」

「はい」練習生一同

「おい、一刀？」

練習の終わった後、一刀を探していたら、木陰で寝ていた。
全く、心配して損したな。
頬を突っついてみる。

「ん？…む…… z z」

起きん。

しょうがない。

一刀を背負い歩き出す。

軽い、こんなに軽いのか。

この身で、刀を振るい、悪魔と戦っているのか。

「ごめん桃香」

「一刀？」

起きたのか、と思い足を止め確認するが……………寝言か、そうか寝言でも女の名前か……………。

一瞬、起こそうかと思ったが、一刀の声に寂しさがにじみ出ている……………起こすのは気が引けた。

「全く、今日だけだぞ」

一刀を背負い直し歩き出す。

(家に帰るのが、こんなに楽しいとは……………主はやてに感謝しよう)

いや、主達か。

心地の良い、重みを感じながら烈火の将は、足取り軽く家路に着くのだった。

設定1（前書き）

有った方が分かりやすいと思ひまして。

設定 1

北郷 一刀

主人公

真・恋姫十無双のエンディング後、元の世界に戻ってしまふ。
その後、かんろに出会い様々な世界を旅し、その中で様々な人と出会い、経験を積んだ。

この世界の前は、便利屋を経営していた。
高校は中退という形になっている。

性格は極度のお人好しで優しい。（特に女性や子供）

だが、自分の大切な人達を傷付ける者は、絶対に許さない。

また気分屋で勘で行動する場合もある。（嫌な勘は絶対と言って良
いほど当たる）

頭も切れ、時に軍師達ですら凌駕する。

権力などには、興味が無いが、何だかんだで、組織のトップや重役
になる事が多い。本人は嫌がっている。

趣味

剣道、昼寝、武器のメンテ、楽器の演奏。

スキル

一刀の魔法は自身で生み出した魔力を使う。ちなみに、魔法の才能
は無いらしく、攻撃魔法、回復魔法等の一般的な魔法はデバイスの
サポートが有っても上手く使う事が出来ない。ただ、難しい魔法は
使える物もあり、プレシア達は疑問に思っている。

強化

魔力や気などで体を強化する。

これを使えば、子供の身でも、悪魔を超える戦闘力が出せる。

広範囲索敵

文字通りの効果。

海鳴市をほぼカバー出来る。

結界

強度もあり、種類も豊富。

使い方も色々で畏として使う時もある。

シヤマルも驚くほどの術式で、ある意味、芸術。

転移魔法

普通の魔導師が使う物より、利便性がある。

武器・デバイス

無名刀

一刀がある世界の王女から貰った刀。ちゃんとした名前があるが、一刀は知らない。

実は、過去に国を滅ぼした妖刀。使い手を操り殺戮を繰り返す呪いがあるが一刀には何故か効かない。

王女は一刀なら呪いも解けると思い、一刀に託した。その呪いも王女が期待した通り解け掛かっている。

スパイダ

別世界のスパイダらしき人から魔力と共に託された魔剣。とてつも

ない魔力を内に秘めている。

一刀が持っている武器の中では最強。
本気の時にしか使わない。

銃・青龍・朱雀

ダンテの銃を参考に一刀が作った。

青龍が威力、朱雀が連射に優れる。

色は、青と赤。銃にしておくのが勿体無いくらい色が綺麗。

紅・リユーフアー、ゼファイ

かんろから貰ったデバイス。

能力は未知数。

一刀はデバイスを使った事が無く、また一刀に魔法の才能が無いため、ほとんど使われない。

一刀の過去を知っているようだが……………。

第十二話・獣の首（前書き）

予告とは違つタイトルですが、気にしない。

第十二話・獣の首

俺達は、なのはとフェイトが落ち着くのを確認してからリンディさんの部屋に行くことにした。

その間も、なのはとフェイトは楽しそうに話していた。

ただフェイトは時折俺に何か聞きたそうだったが、おそらくプレシアさんの事だろう。

まあ、プレシアさんについては、俺に話す気は無い。

何しろプレシアさんが自分で話すと言っていたのだ。

「ここだ」

クロノが足を止める。

どうやら、リンディさんの部屋に着いたらしい。

アースラに限らず、戦艦と言うのは、部屋の見た目ではどんな部屋か分からないな。

と思いつながら、部屋に入ると……………。

「なんで和室？」目の前の光景は明らかに以上だ。何しろ和室それも、茶室だ。

ここ戦艦だろ？なんで茶室がある……………待てよ、確か戦艦の中に温泉作っている人達もいたな。

……………人それぞれ、これも個性か。

「ようこそ、一刀さん。そちらの方達は？」

リンディさんが微笑みながら話しかけてくる。

……………何飲んでんの？抹茶の中に砂糖入れてたよね？

無視しよう怖い。

「俺の仲間が右が焰耶、左がたんぽぽです」

焰耶とたんぽぽを紹介する。

「焰耶だ」

「たんぽぽだよ」

「私は時空管理局提督アースラ艦長リンディ・ハオウランと言います。よろしくお願いね」

リンディさん、提督だったんだな。

「ところで飲みます？」

「「「え？」「」」

リンディさんが抹茶を進めてくる。

念話ではなく、アイコンタクトです。

（お館、あれは飲んで平気なのか？）

（え……………）

（馬鹿！なのはさんとユーノ君を見なさいよ）

なのはを見ると首を振り、ユーノを見ても首を振っている。
なるほどな。

「「「いりません」「」」

当然断る。

「あら、残念ね。美味しいのに」

「艦長、それより会議を始めましょう」

クロノが切り出す。

「そうね。一刀さん話を聞かせて」

場に緊張が走る。

さて、悪魔の話をするなら、この話は欠かせないな。

「その前に、一つおとぎ話を聞いてもらいたい」

「え!？」（一刀を除く全員）

一刀が語るのは、一人の悪魔の話。たった一人で魔界の軍勢と戦い抜きついには魔帝すら封じた裏切り者の悪魔の話。

それは伝説の魔剣士の軌跡。

その悪魔の名は、魔剣士『スパイダ』

悪魔の身でありながら、愛を知り、愛のために戦った、最強の悪魔。

語りを終わった後に、一刀が一本の剣を取り出す。

柄元に骸骨の装飾が施されている。

「お館、その剣はなんだ」

「貰ったのさ………スパイダに………別の世界のスパイダにだけどね」

一刀の脳裏に蘇るは嘗ての記憶。

—————?—————

「ほう？人の身で在りながら、悪魔に立ち向かうか……面白いな小僧」

片眼鏡を掛けた貴族みたいな格好をした銀髪の男が、ボロボロになった一刀を見ながら言う。

この時の一刀はある孤児院に厄介になっており、まだそこまで強くは無かった。

だが、孤児院が悪魔に襲われ、子供達を逃がすため囷として残り悪魔と死闘を繰り広げたのだった。

「み……な……は？」

この時、一刀は致命傷を負っていた。

「自分が死にそうなのに、他人の心配か？」

片眼鏡の男が楽しそうに言う。

否、この時男は嬉しかったのだ。

男は探していたのだ、誰かのために命を賭ける事の出来る者を。男の二人の息子には、すでに、力を想いを託した。だが、男の力を託す者がいなかったのだ。何しろ息子達は自分の力できつと男を超えらる。自分の力は邪魔になるだけだ。

故にリベリオンと閻魔刀は託しても、スパイダを託す事はしなかった。

だが、今見つかった。

この男に託そう。

「お前に力をくれてやろう。その力をどう使おうかはお前の自由だ」

ボロボロの男に手をかざす。

「後は、お前次第だ。北郷一刀」

ここで一刀の記憶は途切れている。

気がつけば病院のベッドの上で、その後あの男を探しても見つからなかった。

ただ一本の剣と魔力が残されていた。

――回想終了――

「一刀？」

ユーノが話しかけてくる。

「お？悪いばーとしてた」

今、思うと何故あの人は俺の名前を知っていたのだろうか。

まあ、考えても仕方ないか。

「この世界には、スパイダは？」

「いないよ。ファントム達も聞いたことが無いんだって」

ファントム達がこちらに来てから、スパイダの事を聞いたが、知らないとの事だった。

この事は、以外にショックだった。何しろスパイダが居ないとなると、ダンテ達も居ないと言う事になる。

勿論、この世界のダンテ達は、一刀の知っているダンテ達では、無い。

だが、やはり友達が居ないと分かると……………。

「なぜ、その話を？」

リンディには、一刀の意図する事が分からなかった。今スパードの話をする必要が有っただろうか？

「さて？なぜでしょう？」

答える気は無いらしい。

(無駄な事はしないとは思っけど……読めないわね)

北郷一刀。彼は本当に何者か？リンディの中で疑問が大きくなっていった。

「そういえば、クロノ」

「なんだ」

「魔界門の破片はどうした？」

「魔界門？」

「俺とユーノが魔界に行き来に使った扉だよ。破片を調べるって持って帰ったろ？」

魔界から帰ってきてすぐ、魔界門は破壊した。何しろ物騒だし。

その破壊をクロノ達が調べる為に持って帰った。

「ああ、あれか。まだ解析中だ」

「そうか」

下手に解析されても困るんだが、何しろ魔界と人間を繋ぐ道を作る力があるんだ。

悪用されたら、面倒なんだよな。

まあ、今は置いておこう。

「クロノ、こっちに出現した悪魔の記録を見せて」

「これだ」

「ありがとう」

ふうん、下級がメインで中級がちらほらね。

「なあ？いくら何でも、被害が大きいぞ」

予想外に被害が大きい。

海鳴市より、出現率は高いが……………待てよ、何故こんなに出るんだ。

悪魔の出現地の中心は、この辺りか……………。

「リンディさん。この辺に何かあるんですか？」

「え？そこには……………管理局の研究施設と、少し離れた所に民間の研究施設があるわ。……………それが何かしら？」

研究施設か……………嫌な予感がするな。

「ここ、調べて貰いません？」

「え？」一同

「最近、何か変わった物を研究したとか、変わった物を持ち込んだとか何でも良いんで」

「え、ええ。分かったわ。調べて見ましょう」

「お願いします」

一体何が、この時、クロノ達は疑問に思ったが、一刀の真剣な顔を見て何も言えなくなつた。

その後、今まで戦った事のある悪魔の資料を渡し今後の対策について話あっていると……。

『艦長！ミッドチルダ西部エルセアに悪魔が出現したとの通報が』

エイミーさんから悪魔の出現を知らせる通信が入った。

「分かったわ。細かい位置は？」

『それが…… 結界でも有るのか、細かい位置の特定が出来ないんです』

「そう、分かったわ。クロノすぐに現場に向かって」

「はい！！」

「ユーノ君、フェイトちゃん。私達も」

「うん、なのは」

「分かった。一刀達は？」

《焰耶、たんぽぽ。戦闘出来る？》

《当たり前だ》

《たんぽぽも平気だよ。……………まさかご主人様！！戦う気！？》

何を驚いてるんだ？

《ご主人様！？戦闘なんて無理でしょ！？》

《そうだ、弱いんだから引つ込んでいろ！！》

二人は一刀が、まだ弱い頃しか知らないのだから、この反応は当然だろう。これが愛紗クラスの場合は一刀の強さを見抜くだろうが、恋姫キャラの中で、『凡人』（それでもAA+クラス）なたんぽぽ達には、まだ無理だった。

《大丈夫さ、俺だって遊んでた訳じゃない》

《でも……………》

《何か有っても守ってくれるだろ？》

《それはそうだが……………》

《なら平気だな》

まだ焰耶達は納得出来てない用だが、時間が無い。

「俺達も行く。なのは、前に渡したカードを貸して」

「え？これ？」

「ああ、みんなもう少し集まって」

場所はミッドチルダ西部だったな。悪魔の反応は……………見つけた。索敵だけは、師匠に誉められたんだ。このぐらいなら余裕だ。

「飛ぶぞ！！」

転移魔法を使う。

このカードは、前に宇吉と戦った時に盗ん……………いや、借りた。

返す気は無いが……………。

何でも次元を超えて移動が出来るらしい。原理はよく知らないが、使えば良い。

——結界内——

「着いたな」

辺り一面、魔界独特の濃い魔力に包まれている。

「ここは、何？」

フェイト、ちょっと気持ち悪そうだな。魔界の魔力に当てられたか？

「魔界？でも……………」

ユーノは平気そうだな。まあ、さすがに一回魔界に行ってるしな。このぐらいだったら、余裕か。

「魔界の魔力がこちらに漏れてきてるな。……………しかし」

どうも、世界が安定していない。

その証拠にあちらこちらから魔界の魔力がこちらに漏れてきてる。

(おかしいな？いくら何でも不安定過ぎるだろ)

ざっと見ただけでも、数十個の次元の隙間がある。

普通は有り得ない。

なら……………どこかにこの状況を作っている奴が居るはずだ。

「お館。どうすれば良い？」

「ん？……………そうだな……………みんな集まって」

俺の案をみんなに話す。

まず、逃げ遅れた人の搜索。

これはスピードに優れたフェイト、そしてフェイトと長い間、共に戦ってきたアルフ。サポートにクロノ。

逃げ遅れた人を集め、結界で守る役。

これは、ユーノとたんぼぼに任す。

何しろユーノには、魔具『シスクード』を渡してある。

この魔具は、広範囲に強力な結界を展開する事が出来る。

ユーノの腕を考えれば、長時間維持出来るだろう。

悪魔を狩り、この状況の原因を突き止める役に、俺、なのは、焰耶。まず、なのは。

機動力こそフェイトに劣るが、その攻撃力は、上級クラスの悪魔にも通じる。

そして焰耶。

彼女の武器は、小回りが効かない。たが、一撃の威力はなかなかの物だ。なら悪魔狩りに回した方が、良いだろう。

「で、こんな感じでどうか？」

「分かった。それで行こう」

「じゃあ、僕はこの辺りに結界を展開する。逃げ遅れた人はここに連れてきて」

「分かったよ」

「みんな、気をつけて」

それぞれが、各自の目的のため、各方面に散っていく。

「は！！」

ムシラと呼ばれる悪魔を無名刀で切りながら、一番、魔力の濃い場所を目指し、焰耶と走る。なのはは、上空の悪魔を相手に、極太レーザーを撃っている。……………どちらが悪魔か分からないな。この時、一刀はなのはは怒らせないようにしようとして心に誓った。

「お館！！いつの間にそんなに強くなった！？」

焰耶の記憶の中の一刀は、お世辞にも戦いにおいては、強いとは、

言えなかった。それが、悪魔をいとも簡単に切り伏せたのだ、疑問に思うのも当然だろう。

「俺だって、遊んでた訳じゃない。今の俺は……………それなりに強いぞ」

焰耶達と俺との間には、時間の『ズレ』がある。何しろ焰耶達は、俺が行方不明になって一週間だそうだが、……………俺の方は、少なくとも四年は経っている。

「……………」

納得しては、無いか。

無言で悪魔に棍棒を叩きつけている焰耶を見て、どう話すか、一刀は考えていた。

そうこうしている間に、目的地に近付いて来たようだ。数人の人影が見える。

その中で、一人異質な雰囲気を放っていた。

魔に魅入られた者、特有の狂気。

生々しくどす黒い欲望。

（人？……………まさか！？）

その男が持っている物に見覚えが有った。

（獣の首？いや……………似てるが、違うな）

『獣の首』

嘗て、ダンテと共に受けた依頼で戦った悪魔が持っていた魔界産の品。

その時は、悪魔に逃げられたが、後にある人物に渡り、最終的には、あるマフィアのボスの手に渡る。能力は三つ。

未来または過去を見せる。ただし、変わりに獣の首に飲まれる。次元移動、一度平行世界に跳ばされた。そして……飲み込んだ人間を魔力に変換する力。

(犬じゃなく、ライオン？獅子か？)

どうらや奴が、正確には持っている獣の首が原因のようだ。

(他の人達は……子供が二人と……軍人か？いや……管理局の人間が二人。家族みたいだな。後は……妖精？) 奴が、抱えているゲージ？みないな物の中に、小さな少女が入っている。文字通り、小さい。

(さて、どうするかな)

少し時は戻り

……？side……

(八八、こいつがあれば……俺は何でも出来る……！)

数日前まで、違法組織の研究者として、山奥の研究所で働いていたが、研究中の獣の首の力に気付き、同じく研究中だった融合騎士を手に逃げ出してきたのだ。

(しかし、管理局に見つかるとは、ついてない)

どうやら、非番の管理局の人間に見つかったみたいだ。

まあ、獣の首からは、ロストギア反応が出ているので当然なのだが。ここで、普段の男なら、逃げるのだろうが、今は獣の首がある。獣の首から、どうすれば良いのか伝わってくる。

「さあ、魔界の扉よ開け!!」

男は気付きかない。己の意志が獣の首に操られている事に。

――?side終――

――ゲンヤside――

(全く。せつかくの休みだったのによ)

ゲンヤ・ナカジマは内心毒づいていた。

珍しく妻であるクイント・ナカジマと共に長期の休暇が取れたのだ。普段寂しい思いをさせている娘達と共に遊びに行こうとした矢先に事件に巻き込まれたのだ。

(くそ!!こいつは何者だ!!)

目の前の男が引き起こしたであろう、異常な空間。しかも、悪魔と呼ばれる生き物まで、周りをうるついている。

妻を見るが、やはり迂闊には、動けないようだ。

「お父さん……………」

「大丈夫だ」

(どうする?)

まさに絶体絶命。

だが……………希望は、思いがけない所から来た。

「動くなよ？危ないから」

「「「「は？」「」「」

どこからか、聞こえてきた子供の声と共に、大量のミサイルが飛んできた。

ミサイル？

「ちょっと待てー！ー！ー！！！！」

「プ、プロテクション」

「わ~~~~格好いい」

「スバル！何言ってるの！？」

クイントが慌ててプロテクションを展開する。
そして目をキラキラさせているスバルにギンガが突っ込む。

「ひい！？」

「この子は、貰っよ」

いつの間にか、居た子供が、男の腕からゲージを奪っていた。
年は、うちの娘達より上だな。

「大丈夫ですか？」

「大丈夫だ。お嬢ちゃん達は？」

上空から降りてきた、少女に聞く。
ん？見たことがあるな。

「アナタ、ほら今話題の高町なのはさんよ」

「ああ！…あの…！」

「え〜と？」

「後にして、なのは、ユーノの所に送るぞ」

「「「は？」」「」

言い終わると同時に、少年が転移魔法を使う。

「細かい話は、転移先にいる人に聞いて…！！！」

文句を言う暇もなく、俺達は送られた。

「――ゲンヤside終――」

「さて、今すぐその獣の首を捨てる。人間が持つ物じゃない」

「五月蠅い！！！！これがこれがある限り、俺は最強だ！！！！！」

飲まれてるな。

目の前の男は気付いていないのだろうか、獣の首に魔力が貯まりだしている。

(このままだと、獣の首が顕現する)

勝てなくは無いが……。

「お兄ちゃん？」

「「「へ？」」「」

後ろから声を掛けられ振り向くと……。

「何で？」

女の子が立っていた。しかも目がキラキラしている。この状況で、その反応……………大物だな。

「ねえ！さっきのどうやったの！？もう一回やってー！」

「後でね？……………なのは。お願い」

「うん。わかった」

なのはに預け、この男の相手をするため、一歩前が出る。

「先手必勝！！」

パンドラをガトリングに変化させ、弾丸をバラまく。

「ハハハ、これがあれば最強だー！」

おいおい、命中したのに無視かよ。

普通の人間なら死ぬぞ……………いや、もう人間じゃないのか……………。

「¥ % * φ」

「焰耶！！みんなを集めろー！！」

「え？」

「こいつが原因だ。倒さないとな」

目の前の男だった、三つの首を持つ巨大な獅子を指差しながら言う。

「さすがに、俺達だけでやるのはキツイ」

勝てなくは無いが、どんな能力が有るか分からない。

こんな事も有ろうかとみんなには連絡用の魔道具を渡してある。

「それまでは、俺と遊ぼうか？」

「はい！」

「……………君じゃなくてね……………」

本当、この子凄い。

「ゴオオオオウ！」

「そう、お前だよ」

パンドラをしまい、無名刀と青龍を出す。

「ま、みんながくる前に終わるかもな」

最後の手段で巨大かしても勝ってないって事を教えてやろう。

第十二話・獣の首（後書き）

次回予告

みんなが集まるまで、獣の首の相手をする一刀。

一刀の圧倒的な力を見て、なのは達は何を思う。

次回・第十三話・誇り高き魂

強いのは魔力では無く、その魂。

第十三話（前書き）

変換されない漢字をどうするか迷ってます。

第十三話

なのはside

(何？あれ)

冷や汗が震えが止まらない。

獣の首から発せられているのは、圧倒的な負の力。

歴戦のデビルハンターですら、押さえ込まれるのだ、小学生である彼女がこの程度で済んでいる方が以上と言える。

実際、焰耶も動きが鈍い。

「うわ~~~~お兄ちゃん。格好いい!!」

「.....」

こ、この状況で、この子ば.....天然？

この時、なのはと焰耶は同じ事を思っていた。

だが、スバルがここまで余裕なのは、一刀の存在が大きい。

スバルは、子供特有の力とも言える物で一刀が居れば大丈夫だと、本能的にわかっている。

(ユーノ君達、まだなの)

獣の首と一刀が戦い始め、まだ五分と経っていない。だが、なのはには永遠にも感じられた。

「デカいだけだな」

無名刀に付いた血を振り払いながら一刀が呟く。

「なのは!!!大丈夫?」

「ユーノ君!!!」

ユーノ君がフェレット姿で走って来る。

「おい、たんぽぽはどうした?」

「彼女なら、非難してきた人達を守っているよ」

「そうか」

「で?その子は?」

ユーノ君がスバルを指差し聞いてくる。

「スバルちゃんだよ」

「そうなんだ。よろしくね、スバルちゃん。僕の名前は、ユーノ・スクライア」

「スバル・ナカジマです」

「ん?ユーノか、こっち手伝え」

獣の首と戦っていた一刀君がユーノ君を呼ぶ。

「わかった」

「ユーノ君!?!」

変身魔法を解きユーノ君がバインドを使い、獣の首の動きを止める。

「三つもあると邪魔だろ?減らしてやるよ」

一刀がバインドで動けない獣の首の一つの首を魔力の刃で切断する。傷口から、毒々しい色の血液が飛び散る。

「ガアアアアア！！」

バインドを千切りながら、獣の首が火炎を吐く。

「効かないよ！！！」

ユーノの結界が、火炎を阻む。

シスクードの力もあるのだろうが、それを差し引いても強力な結界だ。

（ユーノ君、強くなってる？）

一刀と共に戦っているユーノを見て、自分の記憶より強くなっている事に驚く。

「ふん！！！」

「焰耶ちゃん！？」

いつの間にか、焰耶も戦闘に参加していた。

一刀、ユーノ、焰耶この三人の中で、やはり一刀が一番目に付く。刀を振るい、銃を撃ち、時にはユーノ達との連撃。

今、この戦闘の中心は一刀だろう。

（そう言えば、一刀君を見てたら怖く無くなった）

そもそもどんなに強くなろうと、一刀の本質は変わらない。

無限とも言える優しさに、人を引き寄せ、どんな絶望的な状況でも、諦めず希望があると信じ時には、自分で作り出す。

なのはは知らないが、それは、あの世界で桃香達の『希望』となり、乱世をおさめるきっかけになった『天の御遣い』の北郷一刀の力。

(ああ。だから、スパイダさんの話をしたんだ)

なのは唐突に理解する。一刀は希望を、スパイダの話は何か大切な物をくれた。

それが、何かは今のものには、良くは分からないが、とても大切な物だとは分かる。

「レイジングハート……私達も行くぞう」

Yes My Mster

不屈の心と共に……………。

――なのはside終――

「デカいだけあって、しぶといな？」

一旦、獣の首から距離を取り一刀が呟く。

さすがに、無名刀と青龍だけで、あの巨体を倒すのは一苦労だ。パンドラを出せば、一瞬だろうがそれも気が乗らなかつた。

(クロノ達はまだ掛かるみたいだしな)

何個か手は、有るがどうするか？

そんな事を考えていると。

「一刀君、私がやるよ」

「ん？わかつた」

レイジングハートを構えたなのはが砲撃を放つ準備をしながら、言

ってきた。

「ユーノ!!! 奴の足を止める!!!」

「わかった!!!」

ユーノがバインドで獣の首の動きを封じる。

「おっきいのいきます!!!」

なのはが魔法のチャージを完了したようだ。
しかし…はやてと言いこの子と言い……………魔力だけなら悪魔の魔力抜きの俺より上だな。

「スターライトブレイカー!!!」

「おおっデカイ!!!」

桜色の光の束が、獣の首を包み込む。

「倒したのか?」「まだ……………みたい」

光が収まると、体の半分以上が消滅してはいるが生きている獣の首が現れた。

「フオ……………オオオオウ」

「チイツ!!!」

消え行く獣の首に青龍を撃つが……………。

「逃げられたか……………」

「そんな……………」

落ち込んでるな。

「なのはのせいじゃないよ」

「ユーノ君」

「うん。なのはのせいじゃない」

実際、なのはの一撃は申し分ない威力だった。

(当たる瞬間、誰かが結界を貼った。でも………誰が?)

「一刀!!」

クロノか。

「遅いよ。終わったから、一通り見て帰ろう」

その後、クロノ達と共に倒し損ねた悪魔が居ないか見回り、居ないと分かると、非難していた人達を連れ管理局に向かう事にした。

「スバルちゃん? 向こうに着いたら、家族の所に帰すからね」

「はあ〜い」

あ! そう言えば、この妖精みたいな子どうしよう?

とりあえず、リンディさんに聞いてみよるか。

第十三話（後書き）

次回予告（予定は未定）

管理局に戻ってきた一刀達。

リンディの口から、獣の首がどこか別の世界に逃げた事を知る。

獣の首の搜索は、時空管理局に任す事にし、仮面の男の主に会いに行く事にした一刀。

そこで闇の書との因縁を聞く。

次回・第十四話

闇の書の因縁を終わらせるため、一刀とクロノとユーノが協力する。

第十四話（前書き）

途中説教ください。

第十四話

管理局に戻ってきて、スバルちゃんを家族の下に送り届けに行ったら、ゲンヤさんとクイントさんに捕まり、悪魔について色々聞かれた。

その後、ゲンヤさん達には、スバルちゃんを危険にさらした事を詫びたのだが、逆に礼を言われた。

「良い人達でしたね」

「そうだね」

紅とゲンヤさん達について話しながら歩きリンディさんの部屋を指す。

「獣の首は、どこに？」

「それは……分らないな」

何しろ、転移魔法で移動した訳じゃない。

それでも途中までは、追えたのだが……。

(移動したってよりは、消えたってのが正しいんだよな)

はっきり言ってお手上げた。

「そうですか……ところで、その子はどうするつもりですか？」

「この子か？んんんとりあえず俺の方で保護しようと思ってるよ」

時空管理局に頼むよりはやての家に連れて行った方が良い気がする。

「そうですね（また悪い癖が…）」

「何？」

「いいえ！何でもありません」

そういうしている間に、リンディさんの部屋に着いたようだ。

「失礼します」

部屋に入ると、既にみんな集まっていた。

「ご苦労様。一刀さん」

部屋に入り、焰耶とたんぽぽの間に座る。

「獣の首は？」

首を振り、リンディさんが残念そうに答える。

「残念だけど、こちらも見失ったわ」

「そうですね」

分かってたけど。

「なのはの魔法に耐えたんだろ？一体何なんだよ、獣の首って？」

犬耳の少女が聞いてくる。確かアルフって言ったっけ。

「なのはの魔法に耐えられたのは、誰かが結界を貼ったからだよ。誰かは分からないけど」

あの時、あの周りには俺達以外居なかったはず何だが……………。

「一体誰が？」

ユーノも気になっているようだな。

「その事と、獣の首については、私達が調べましょう」

「お願いします。……………ところでリンディさん？」

「何かしら？」

「ユーノとクロノを借りたいのですが？」

「「「え」「」」

「と言うわけで、借りてきます」

ユーノとクロノの手を掴み部屋を後にする。

「ちょっと待って！！」

「あ、なのは」

なのはとフェイトも一刀達の後を追いかけて部屋を出て行く。

「え……………」

「「いつもの事だな（ね）」「」

部屋に残り、困惑するリンディをよそに普通のお茶をすする、焰耶とたんぽぽだった。

「ちょっと！一刀！！どこに行くんだよ？」

「闇の書の主を救うために協力を取りに行くんだよ」

「闇の書だと！？」

クロノの顔が驚愕に染まる。

「知ってるのか？なら話は早い。君たちに闇の書を夜天の書に戻すための手伝いをしてもらうから」

「はあ！？」一同

「詳しくは、まとめて話すよ」

この部屋か？あの仮面の魔力がする。

「失礼します」

部屋の中には、老人が一人に、猫娘が二人いた。

「北郷一刀です。闇の書いや、八神はやて達の事で話があります。ギル・グレアムさん」

「何時、私の名前を知ったのかね？」

「はやてに援助している人を探してる時ですよ」

はやての口座に振り込まれる金額は、少なくない、はっきり言って多すぎる。

なら、必ず金の流れがあるはず。

後は、その流れを遡れば良いだけだ。

もちろん口座は偽名だったが、その程度ならどうにでもなる。

（偽名だと言うのに、真実を掴んだか）

目の前の子供は一体何者だ。

今までの経験が語る。この男は数多の戦場をくぐり抜けてきた、歴戦の戦士だ。

だが……………それにしても、存在が優しいすぎる。

戦い続けながらも優しさを無くさなかったのか。

「今から、俺がやるうとして話を話します。その後で、そちらの対応を聞かせてもらいます。ユーノ達も良いな？」

「分かった」一同

「じゃあまず……………」

――数十分後――

「って事になってる」

今までの事をあらかた話終え、用意していたお茶を飲む。喉が渴いていたからお茶が美味しい。

「え〜〜と。規格外な奴とは、思っただけど……………」ここまでとは……………」

「まあ、一刀だからね」

「ああ、一刀君だもんね」

「なのは？ユーノ？それどついう事？」

「そのままの意味」

ユニゾンか！！

なんか益々仲良くなったな。

見る、フェイトとアルフが驚いてるじゃないか！！

「「一刀にだよ！！」」

こちらユニゾンか！！さすが主と使い魔。

そんな事より。

「でギル・グレアムさん？あなたはどうします？」

「……………」

「あなたと闇の書の因縁は分かります。ですが、はやてには、関係無い！！」

「っ！！」

クロノが反応したが、今は無視する。

彼らと闇の書の因縁は、ついさつき、月見からメールが着て、教えて貰った。

「だが……………」

「グレアムさん、あなた確か地球の出身でしたね？」

「そうだが、それが？」 「あの地球は、いやこの世界は良いとこですな」

「？」

「この世界では、全ての存在が……………祝福されている」

魔界門を通りこの世界にきた悪魔であるファントム達、一度は死んだアリシア、焰耶達……………そして北郷一刀。

「当然、闇の書の主であるはやても、彼らも、そしてあなたも」

「……………」

「あなたが、あなたの意志で『ここ』に居るなら、この世界はあなたを拒まない」

「なら、何故あの時！！私の部下は助からなかった！！」

クライド・ハラオウン。

自分の部下だった男。

「……………」

(真っ直ぐな……良い目だ。それに比べて、私は……………)

「北郷一刀。私に何ができる?」

「お父様!?!」

猫娘が驚いた声を出す。この子達、グレアムさんの娘だったんだ。

「いや、違うから」

クロノがツツコミを入れてきた。

分かってる。少し空気を軽くしたかっただけだ。

「自分で重くしといて」

「うるさいよ」

つい熱くなってしまった。

(悪魔と戦った後なのがまずかったな)

しかも、悪魔の魔力を使ったし。

強力なんだが、使った後は、しばらく性格が少し……………ね。

まあ、今は

「グレアムさん。闇の書の事ですが、闇の書のバグを切り離します」

「そんな事が出来るのか!?!」

クロノ耳元で怒鳴らないで。

「ああ、出来る」

切り離すのは、そんなに難しく無い。問題はこの次だ。

「切り離した方をどうするかが問題なんだ。前回の記録を見たけど………なかなか骨が折れそうなんだよ」

もし、あんな物が出てきた場合………周りの被害が想像出来ない。

「協力して欲しい事は、まず戦う場所に結界を貼って欲しい。そして、戦闘を手伝って欲しいんです」

「分かった。だが、戦闘の協力と言っても今の管理局は悪魔の事で、手が一杯だ」

でしょうね。何しろあれだけ派手に犯罪者を捕まえてリンカーコア取って問題にならないんだから。

「大丈夫です。この子達とアースラが有れば」

「え？」ユーノ達

何驚いてるんだ？

「そうか、私も出来るだけ協力しよう」

「ありがとうございます」

頭を下げる。

やはり、この人も良い人だ。

「もし、あの時………いや辞めよう」

彼がいたら結果は、変わっていたのだろうか？

「では、俺達はこれで、また連絡します」
「気を付けて」

彼らが部屋を出て行く。

「あー！そうだー！」

「なにかな？」

一番最後に部屋を出ようとした彼が振り向き

「全部終わったら、はやてに会って欲しいんです」

「良いのかね？私は」

「はやての足長おじさんでしょ」

許してくれるのか。

「分かった。必ず会いに行こう」

「約束ですよ？」

「約束だ」

笑顔を浮かべ部屋から出て行く彼の後ろ姿が、大きく見えた。

「これが、器か……………」

「お父様？」

「何でもない」

クライド……………私は、過ちを犯す所だったよ。彼のおかげで、思い出したよ……………大切な物を。

あの世がもし有るなら、そこでお前と会う時、胸を張れるよう生きていこう。

第十四話（後書き）

次回予告

グレアムの協力を得た一刀。

一旦、八神家に帰る事に。

八神家に帰った彼の前に、予想外の人物が現れる。

次回・第十五話・雪蓮

第十五話（前書き）

これから一気にキャラが増えます。

第十五話

グラムさんの協力を得た訳で、俺達は一旦海鳴市に帰る事にした。

「リンディさん。ユーノ達は海鳴市に連れて行きます」

「ええ、アースラも準備が出来次第出航する手筈になっているわ」

リンディさん手が早いな。

「後、頼んどいた調査の方はどうなってます？」

「……………管理局の研究所で、悪魔の研究をしていたの」

「悪魔の研究？」

これは、当たりか？

「その為に、悪魔を呼び出していたみたいなのよ」

当たりだな。

しかし……………

「ちょっと待って下さい。

いくら何でも、手が早すぎます」

ユーノの言う通りだ。

俺が頼んでから、数時間しか経っていない。

「……………一刀さんと同じ事を考えた人が居て、先に調べていたの。その人物から部下を助けてくれたお礼として、教えてもらったのよ。民間の施設の方は、これから。」

それとこの話は、まだ内緒。誰にも言わないで

「はい」(一同)

良い人だな。

一体誰だろう？

「では、この話はここまで。

話は、変わるのだけど一刀さん達に頼みがあるの」

「はい？」

リンデイさんが良い笑顔を浮かべる。

何だろう？嫌な予感がする。

「囑託魔導師試験を受けて欲しいの」

「食卓？」

「字が違う！！」

クロノが、ツツコミを入れてくる。

これが、ヴィータだとデバイスで殴りかかってくるんだが、クロノはそんな事はしない。

安心していたら、

「真面目にやれ！！」

ゴツチン。

「ア、アルフさん？

良いもん持ってんじゃないか」

アルフの鉄拳が、俺の頭に炸裂する。

ガクッ

「起きろ」

「うっ」

焰耶が、倒れた俺を無理矢理起こす。

「オホン。

で、受けてみない？」

リンデイさんが咳払いをし、空気を変えようとするが、もうグダグダだ。

「囑託……ねえ」

知らん試験だな。

多分、民間協力者とかの資格みたいな物だとは、思うが……。焰耶達を見るが、どうやら俺の意見に従うようで俺の方を、じっと見てくる。

「フェイトさんも、今は囑託魔導師なのよ」

「フェイトも？」

裁判中じゃなかったのか？

疑問に思いフェイトを見ると

「裁判に有利に働くし、異世界での行動制限がぐっと少なくなるの。リンデイ提督やクロノのお手伝いもできるようになるし」

なるほど。

それなりに力のある資格みたいだな。
だが、そうなると試験も難しいはず。
受かるか？

「大丈夫だよ。」

「一刀達なら」

フェイトそんなものすごく良い笑顔で言われたら……………。

「やります」

「本当！」

断れないだろ！

「そう。」

試験内容は、筆記試験に「……えっ!?」「……ああ、大丈夫よ。
一刀さん達は特例として、戦闘試験だけだから」

『その分難しいのだけど』って小さい声で言った……!!
しょうがない、筆記試験が無いだけましか。

「試験は何時ですか？」

決めた以上は、迷わない。

「明後日の、10時にここに来て」

リンデイさんから、地図の書かれた紙を受け取る。

「分かりました。」

では、明後日」

この日は、これで解散する事にした。
何しろ、悪魔との戦闘の後だ。

俺や焰耶達は、平気でも、フェイト達は疲れてるみたいだったし。

???

「月見ちゃん？」

筋肉質の巨大な男が、月見に話掛ける。

この男、見た目がヤバイ。

筋肉質の体に、下着一枚の上、スキンヘッドに三つ編みと訳の分からない髪型なのだ。

子供が見たらトラウマ確定。

普通に歩いていたら、確実に捕まる。

「……………獣の首の行方はわかったのかしら？」

月見も顔が引きつっている。

大男はクネクネしながら、

「ええ、最悪な男の手に渡ったわ。

ご主人様達は苦労するわね」

急に真剣になる大男。

「『彼ら』の仕業かしら？」

「ええ、ほぼ間違いないわ」

「そう。」

彼らが関わってきた以上、早く彼女達を一刀に合流させないとね。

「一刀だけでは、危険だわ」

「どの位掛かるかしら？」

大男が、心配そうになる。

「どうやら一刀の事が気になるらしい。」

「正史の闇の書が完成する頃までには、全員そろえばすよ」

そのための準備のために月見は大忙しで一刀と会う余裕がない。

そのため一刀に説明しなければならぬ事が貯まってきている。

「そう。」

私も手伝いたいんだけど………彼の手伝いもしないといけないから………」

「わかっているわ。」

「十分よ、ちようせん」

ちようせんと呼ばれた男は、その言葉を聞き、笑顔で手を振りながら消える。

「これから、大変よ。」

「一刀」

八神家

「ただいま〜」

八神家に付き、ドアを開けると、そこには

「あら？お帰りなさい。
一刀」

褐色の肌にピンクの髪の毛の活発そうな、美少女が笑みを浮かべていた。

「もしかして……………雪蓮!？」

小霸王こと呉の王が目の前に立っていた。
もちろん、俺と同じように、子供になっているけど。
はやてよりは年上のようなようだ。

「正解〜」。

私だけじゃないわよ」

「へ？」

なんか不吉な予感が……………。

「ご主人様!？」（桃香、朱里、雛里、翠）

「みんな!!久しぶり」

「久しぶりっじゃない!!」一同

「一刀?ちょーとお話しようか？」

はやて達怖いんですが。

「はい」

その後の事は、話したくない。

ただ、怖い目に会った事だけをここに記す。

北郷一乃。

第十五話（後書き）

変換の仕方の分からない漢字は、ひらがなで行きます。

第十六話

どうも北郷一刀です。今日は、囑託魔導師試験を受けるために管理局に来ています。なぜか、雪蓮達もついて来ています。

『さて……………ぼちぼち始めようか？心の準備はオーケー？』

「はい」

『いま試験官がそっち向かうから頑張って戦ってね』

エイミイさんの一言を聞き、嫌な汗が出る。
なぜだろっ嫌な予感がする。

「エイミイさん？ちなみに試験官は、誰？」

「私達だよ」

目の前に転移魔法を使い、なのは、フェイト、クロノが現れた。って何で三人なんだよ！

「特例だからな。それなりに難しいに決まっているだろ」

「難しいにも限度があるだろ！！」

なのはだけでも、つらいつてのに、クロノにフェイトも付いてくるのか……………面倒くさい。

「すみません？帰って良いですか」

言った瞬間、三人にデバイス突きつけられました。
やるよ、やればいいんだろ!!

「紅、やるつか？」

「わかりました」

囑託魔導師試験だし、デバイスを使うか。
そういえば、デバイスは初めて使う。

「紅、セットアップ！」

「ハイ!!マスター!!」

紅のテンションがやけに高い。

「って？なんで聖フランチェスカの制服？」

なぜか、俺のバリアジャケットは、懐かしい聖フランチェスカの制服。もちろんサイズはかなり小さい。

そして腰のベルトには、二振りの刀がぶら下がっている。
右の刀は、左に比べやや短く、刀身が厚い。

「ふうん………いい刀だな」

《マスター。私達には、非殺傷設定があります。ですので、思い切りやりましょう!!》

テンション高!!!!!!

普段の二倍ぐらいのテンションだ。

「始めても良いかい？」

「良いぞ。クロノ」

二本の刀を構える。

クロノ達もそれぞれのデバイスを構える。

「先手必勝！」

三人とまともにやり合うのは、無謀だ。まずは、一撃が怖いのはを狙う事にし、右の刀に魔力を纏わせ振り抜き衝撃波を放つ。

「プロテクション」

魔力障壁に当たり霧散する。

だが、本命は別にある。

「イタ！？えつなに！？」

なのはには何が起きたか理解出来なかったようだ。別に大した事ではない。衝撃波の一部を転移魔法でなのはの隣りに転移させただけだ。

「なのは！？だいじょうぶ？」

「うん。だいじょうぶだよ」

「良かった」

「……………」

うっ、隙だらけなんだけど攻撃して良いのか？
などと思っていたら、横からクロノの魔法が飛んできた。

「危なっ！？クロノか！」

「よそ見は、いけないな」

ちいつ飛行魔法か、厄介な。

クロノの魔法をよけながら衝撃波を放つが、高低差がある分向こうが有利だ。

「何か、遠距離用の武器は無いの？」

《一応ありますが…》

「出して！」

《わかりました》

「……………ショットガンか」

至近距離なら絶大な破壊力があるショットガンだが、この距離では弾丸が散ってしまい威力は期待できない。

ほかの武器を使えば良いのだが、紅を使うと決めた以上他の武器を使うのは気が引けた。

「なら、近付けば良いか」

両足に魔力を込め、地面を全力で蹴り飛び上がる。衝撃で地面が陥没した。

「なっ!?!」

これには、クロノも驚いたようで、一瞬動きが止まる。

その隙に、クロノにショットガンを突き付け、そのままトリガーを引く。

「ぐっ」

ショットガンの零距离射撃は並の悪魔ですら、耐えられ無いほどの威力がある。非殺傷設定があるとはいえ、クロノに耐えられるものではない。

「一人目」

クロノを倒したが、そういえば、なのはとフェイトはどこだ？

二人を探すために気配を探ろうとしたら、上空に、やたらデカい魔力が……………。

一応確認のために上を見る。

「……………マジ?」

なのはとフェイトが二人で強大な魔法を展開していた。

どうやら、クロノはこの魔法のチャージのための罠だったらしい。なるほど、喰らったらヤバイ。ってこの訓練所もヤバイんじゃないか？

「避ける………のは、無理か」

避けるのも無理、喰らったらアウトか………なら、正面突破しかないな。

全身に魔力を流し強化する。ここまでなら、いつも通り。今回は、切り札である『デビルトリガー』つまり、スパイダの魔力を使う。ダンテ達と違い、俺の場合は、体の周りに白銀のオーラみたいな物を纏い、目の色が赤くなるだけだ。そのまま魔力を貯め続ける。

見学組み side

「え………と」

目の前の光景に、さすがに血の気が引くリンディ達。

なのはとフェイトはいつも通りだとして、一刀の魔力も人外だ。

「訓練所………保つかしら」

リンディの心配をよそに桃香達は一刀の強さに驚いていた。

だが、それも当然だろう。なにしろ、桃香達にとつて一刀と離れて一週間しか経っていない。だが一刀は、少なくとも数年は経っている。その間に一刀は様々な世界で戦ってきたのだ。

「すごい………ご主人様」

桃香は純粹に一刀が強くなった事に驚いていたが、雪蓮達は違った。なにしろ、一刀の弱さはよく知っているのだ。その一刀がとんでも

なく強くっているのだ。

(どれだけの事があったのよ)

疑問が膨らむ雪蓮達。帰ったら聞き出そうと決意する。

見学組み終

「行くぞ！なのは、フェイト！」

「こつちもいくよ！！！」

「コブラストカラミティッ」

なのはとフェイトの砲撃が来る。
予想以上にデカい。

「こつちも、切り札だ！」

できるだけ多くのカートリッジをロードする。

「朱雀炎翔破！！！」

両の刀から朱雀の形の炎を放つ。

なのは達の魔法と朱雀がぶつかり合い、激しい閃光が散る。

「あー！ヤバい！」

即座に全身に魔力の鎧を纏う。ダンテが使っていた『ドレッドノート』と同じものだ。ただ、俺の方が若干もろいが無いよりました。

「フェイト！なのは！防御しろ！！！」

「えっ」

あれは、間に合わない。そう判断し、二人を転移魔法で、桃香達の所に送る。

「あー！俺も逃げれば良かった」

「主……………」

なのは達の砲撃と俺の放った朱雀が大爆発を起こす。

これは……………キツイ。魔力の鎧が……………削られる。

「っ
」

時間にすれば、一瞬なのだろうか、もの凄く長く感じた。

爆発がやんだ後、周りを見回せば、訓練所はボロボロ、ほとんど原型を止めていない。

「あははははっよく生きてたな。俺」

あまりのひどさに笑いがこみ上げてくる。

「これじゃあ、試験どころじゃないな」

とりあえず、桃香達と合流しようと思ひ、歩きだそうとしたら

「おっ？」

ドサッ

体が動かない。どうやら、やりすぎたらしい、全身に力が入らない。しかも眠い。

「紅、寝るから、後よろしく」

「えっ！マスター!?!」

あゝそういえば、試験はどうなるんだらう？
などと考えながら眠りにつく。

この後、北郷一刀は丸一日眠り、起きてからはやて達は無茶をしたことを叱られる事になる。

第十七話

――？？？――

かつて、魔王を利用し、漢王朝を復活させようとした男が居た。
男の名は劉協。漢王朝最後の帝。

劉協は魔王の力を使い太陽を隠し、死者の軍を操り三国に戦いを挑んだ。

死者の軍の前に魏は敗北し、呉は壊滅寸前まで追い込まれた。
なにしろ相手は死者の軍。戦で人が死ねば、その度に相手の軍は、
強大になるのだ。

さらにかつての友、恋人、家族が敵として立ちふさがるのだ。
その姿を見て、兵達が戦える訳がなかった。

人々は絶望し、こんな時代に生まれた己の不運を嘆いた。

だが、蜀だけが違った。

いや、違う。北郷一刀、奴だけが違った。

絶体絶命の状況でも諦めず、魏、呉の生き残りをまとめ、三国を
一つにし劉協に戦いを挑んできた。

死者の軍の前には無力……そう劉協は、思っていた。

だが、北郷軍は、死者の軍を破り、劉協がいる洛陽まで攻めてき
た。

そうして、ついに劉協を関羽達共に倒した。

あの世界で、一刀達に敗れた劉協だったが、何の因果か気づいた
らこの世界に傷だらけで立っていた。

おそらくは、手に持っていた突破の鏡の破片の力だろう。
何にしても、劉協は北郷一刀に復讐する機会を得たのだ。

(獣の首に突破の鏡の破片……………後は、闇の書さえあれば……………)

暗闇の中、劉協は狂気の笑みを浮かべる。

それは……………魔に魅せられた者、魂を腐らせた者の笑みだった。

――八神家・早朝――

早朝の八神家の庭に木刀のぶつかり合う音が響く。

果敢に攻めている方が、ユーノ。その全てを受け流しているのが
雪蓮。

「ユーノも頑張るな〜」。もう、一週間か〜」

囑託魔導師試験（暫定AAAランクだった。なぜ暫定なのかは、
また今度）の後、気絶した俺を八神家に運んだ後に、雪蓮達に鍛え
てほしいとユーノ達が言ってきたらしい。

なのはやフェイトも普段は一緒に訓練しているのだが、今日は、
休みだ。

なにしろ、デバイスが無い。

先日のなのは&フェイトVSシグナム&ヴィータの模擬戦で、壊

れ、修理&強化のためアースラに預けてある。もうすぐ完成だそうだ。

「そっぴゃ、一刀？桃香達は、どこに住んでるんだ？」

隣で訓練の様子を見ていたヴィータが、不思議そうに尋ねてきた。

「ああ、月見が用意してくれた寮に住んでるよ」

桃香達の生活に関しては、必要な物、衣、食、住に関しては、月見が用意してくれた。

桃香達が大人（今の見た目は、はやてと同じぐらい）になるまで暮らせる額のお金も。

もちろん、大食らい達の食事代は別に有る。

「一刀は、どうするんだ？」

「ん？何が？」

ヴィータの質問に首を傾げる。

「だから、このままはやての家に住むのか、聞いてんだよ！！」

なぜか怒ったヴィータが耳元で、怒鳴る。

み、耳が……。鼓膜が、破れるかと思った。

「あ~~~~。しばらくははやての家に住むかな。はやても良いって言うてくれたし」

少なくとも、闇の書の修繕が終わるまでは、はやての家に住むつ

もりだ。

「そ、そうか」

ヴィータの様子が変なので、問いただそうとした瞬間。

ドゴオン

「ブッ！」

「あー!!」

雪蓮の一撃が、ユーノにクリティカルヒットした。

お見事、……………じゃなくて、ユーノ!!生きてるか!!

「雪蓮!!やりすぎだ!!」

「ごめ〜ん。つい」

ついつて、あなたねえ。

ユーノが怪我したら、俺がなのはに怒られるんだよ。

あの殺気に威圧感……………思い出すのも恐ろしい。愛紗には、劣るけど。

「……………完全にのびてるな。ヴィータ、とりあえずシャマル呼んできて」

「わかった」

家に入って行くヴィータ。

「ふう。……………ユーノどうかかな？」

「まあまあね、良い線いくと思うわ」

「そうか……………」

なら、後で何か刀でも、渡すか。

ちなみにアリシアには、たんぽぽの槍を参考に作った『雷影』を渡してある。

「一刀〱シャル連れてきたぞ」

「ん？ああ、シャル頼むよ」

「はい」

シャルの回復魔法を見ながら、ユーノにどんな物を渡そうか、考えていると

「一刀〱〱？みんな〱〱ご飯やで〱〱」

はやてか、もうそんな時間か。

「わかったよ！……………シャル、ユーノは？」

「……………しばらくは無理ですね。先に食べちゃいましょう」

ユーノを日陰に運び、食卓に向かう。

今日の飯当番は、はやて、朱里、雛里の三人だ。

このメンバーは、店が開けるくらい料理が、美味しい。そのため、みんな集まるので、最終的にくじ引きで決めている。今日のメンバーは、八神家は当然として、雪蓮、翠、朱里、雛里、アリシア、ファントム、ネヴァンだ。

人数が多いので、リビングにも、料理を運んである。運んだのは、フォントムだ。

最近、フォントムも人型で過ごしている。体長はザフィーラよりでかく、筋肉質の日本人離れた大男だ。

日本人じゃないが、戸籍上は、はやての祖父の弟の息子って、事にしてある。

ネヴァンは、はやての祖母の姉の娘の娘ってことになっている。

《いただきます》

食事が、始まると食卓が戦場が変わる。

翠が大量に食べ、負けず嫌いなシグナムとヴィータが続き、フォントムも鈴々ぐらい食べるのであつという間に食べる物が、無くなるのだ。

まあ、はやてが楽しそうなので、問題無い。

「そう言えば、一刀？」

「何？アリシア？」

食事も一段落した時に、アリシアが尋ねてきた。

「母さんの事何だけど……体は、大丈夫なのかな？」

プレシアさんの事が、心配なのか。
みんなもか、みんなの視線が集まる。

「ああ、華陀も大丈夫って言ってたし、もう平気だよ」

華陀もこの世界に来ていて、プレシアさんの事を話し治療を頼んでおいた。

彼の様々な世界で磨きあげられた治療術は、凄まじく、それこそ、肩こりから不治の病すら治してしまう。

俺も何度も命を助けた。

その彼が大丈夫と言った以上、プレシアさんの体は大丈夫だろう。

「良かった……」

「アリシアちゃん、良かったな〜」

「ああ、はやてもその内見て貰うからな」

「私も？」

はやての場合は、原因である闇の書を何とかしない限りは、治らないのだが、体の負担を減らし麻痺の軽減や麻痺の進行速度を遅らせる事は、出きるだろう。

「うん。近い内に治療しに来るから」

「ふ〜ん。華陀さんか……どんな人なんやろ？楽しみやわ〜」

はやての声を聞きながら、俺ははやて達の教育のために華陀に一人で来るように念を押しておこうと、心に決めた。アレを見たら、はやて達泣きそうだし。

「さてと、そろそろ時間か……。はやて、俺はこの後、ユーノと一緒に無限書庫に行くってくるからね。連絡用にゼフィを残して置くから、何か有ったら連絡して」

首に掛かっているゼフィをはやてに渡す。

「りょーかいや」

ここ最近、訓練の後は無限書庫で調べものをするのが、日課に成りつつある。

調べるものは、闇の書の事と、魔界を封じ込めた者の事。

闇の書のは、クロノ達の話や過去の情報で、修正案はできたが、知って置いて損はない。

もう一つの魔界の事だが……。誰かが、魔界を封じ込めなければ、次元の隙間や魔界門が有るはずが無い。

ならば、誰が封じ込めたのか、気になった。

「じゃあ、ユーノを起こすかな」

まだ、目を覚まさないユーノ。

最近忙しいから疲れも貯まってるのだろう。

もう少し休ませてやりたいのだが、時間も無い。

しょうがないが、そろそろ起きて貰おう。

「起きろ」

ペチペチ
頬を叩いてみるが

「すう〜」

熟睡だな。

しょうがない、白い悪魔の力を借りよう。
録音してあるなのはの声を聞かす。
悪魔化しているなのはの声を……………。

「うあああああ!!!!」

飛び起きるユーノ。

怖いよな、なのはの悪魔モード。
何かに使えそうだったから、録音してたんだけど、まさか目覚ましに使えるとは。

「起きたか、無限書庫に行くぞ」

「えっ？」

ユーノに構わず、さっさと転移魔法を使う。
なにしろ時間が無い。今日は、夕方になのは達と遊びに行く予定だ。

しかも、そのまま夕飯をみんなで、食べるそうだ。
確か、アリサって子の家でバーベキューをするって言ってたっけ。

「ちよつとま……………」

ユーノが言い終わる前に、魔法が発動する。

――八神家 side――

一刀達が、無限書庫に出かけ数時間が経った。ちょうど昼飯の準備の最中だ。

「桃香ちゃん！卵レンジに入れたらあかんよ！翠ちゃん！つまみ食いしない！！！」

「はい」

今、八神家には、朝のメンバーに加えて、たんぼぼと延耶がいる。

「ん〜」。翠ちゃんが沢山食べるし〜もうちょい作ろっか」

「そうですね。もう少しだけ作りましょう」

主に料理を作っているのは、はやて、朱里、雛里の三人だ。

ほかの人間は、はつきり言って、戦力外。

例として、料理が劇薬になるシャマル。

卵をレンジで温めようとした桃香などである。

はやて達が料理をしていると

ピンポン。

「ん？私が出てこよう」

言つとファントム（人間モード）が玄関に向かう。

「おおきに〜ファントム」

お礼を言いながらも手が止まらない。

ファントムが玄関に向かい数分後。

「大体、このぐらいで平気かと」

目の前の料理、ざつと見て五十人分は、軽くある。

これを三人で作つたのだ。もう店が開ける。

「はやく客だ」

ちょうどファントムが戻つて来た。

後ろには、二人の男性が立っている。

《！！！！》

その人物達を見て、桃香達に戦慄が走る。

忘れもしない。なにしろあの世界で北郷一刀の命を狙い、何度も戦つた敵なのだから。

「差慈、宇吉」

雪蓮の殺気を含んだ呟きに、彼らは笑みを浮かべ答える。

「お前たちに、伝えることがある」

第十八話

——無限書庫・一刀side——

「ん？…この気配は…左慈に宇吉か？…なんで八神家に？」

結界に入れた以上、はやて達に危害を加える気は無いみたいだな。仮に危害を加えようにもシグナム達や桃香達が居れば平気だろうし。

まあ、彼らも今は敵って訳じゃ無いし、様子見かな？そう思った瞬間。

通信が入り、クロノの切羽詰まった声が、無限書庫内に響いた。

「一刀！！！！すぐにアースラに来てくれえ————！！！！！！ば、化け物がああ、誰あれが、ピーでピーよりピーで見るも耐えない化け物ですってえええ！！！！」そこまで言っていない！！！！—刀！！速く来て、これをどうにかしてくれええええ！！！！」

プツン

「……………」

「……………」

その時、確かに時間が止まった。

「さて、帰るか」

関わりたくない。もう、嫌な予感がバンバンするんだもん。帰っ

てはやて達一緒になのは達を待つての方が良い。

あつ！左慈達が居るんなら、彼らに引き取って貰おう。それが良いそうしよう。

「いや、アースラ行こうよ」

ユーノの君は、正気か！？向こうには悪魔よりもヤバい化け物が居るんだぞ！？

「でも、さ……………」

「……………ハア、判ったよ」

転移魔法展開、行き先はアースラ……………行きたくないなあ。ハア……………

——アースラ・艦長室・一刀side——

アースラについたら、あつという間に乗務員達に艦長室まで運ばれた。

みんな涙目だったなあ。

「あ！ユーノは八神家に帰ってた方が、いいよ」

『いいよ』の部分に力を込める。

「えっ？ここまで来たし、付き合っよ」

「……………そう……………」

伝わらなかったか、後悔しても知らないぞ。まあ、心が傷ついたら、なのはに慰めてもらえ。

「……よし……」

覚悟を決め、艦長室のドアの前に立った瞬間「ダーリイーン！！！合いたかったわ！！！！」っと化け物が飛び出してきた。

隣でユーンが叫び声を上げるが、俺は慌てずデバイスを展開。そのまま、カートリッジを全部ロードし、魔法を放つ。

「オラオラオラオラオラオラオラオラ」

ドゴオン！ズゴオン！ドゴツゴオン！！

爆音と共にアースラが揺れるが、今は気にしてる余裕は無い。ただ、ひたすらに魔法をぶち込んだ。

――数分後――

リンディさんとクロノにアースラを壊す気かっと言われ仕方なくチヨウ蝉への攻撃をやめ、艦長室の中で話を聞くことにした。

「それで、何のようだよ。チヨウ蝉？」

「月見ちゃんからの伝言を持ってきたのよ。はい、これよ」

あれだけやられたのに無傷のチヨウ蝉を見て、クロノ達はかなり引いていた。無理もないか。

それより手紙、どこから出したんだよ……………。

受け取りたくないが、しょうがない。手袋をしてから受け取る。

「一刀へ」

本来なら左慈達に直接アナタに伝える用に頼んだのだけど、アナタにはまだ、会いたくないそうなのでこうして、手紙で伝える事にしたの。

まず、劉協に気をつけなさい。

彼が今、獣の首を持っているの。何をするつもりかは判らないけど、どうせろくでもない事だと思うわ。

2つ目は、彼女達のことよ。

もう少して全員そろつと善よ。住む場所やお金などの心配はする必要は無いわ。詳しい事はチヨウ蝉に聞いて。

3つ目は闇の書の防衛プログラムの事で悩んでいるなら、アースラに良い物が有るわよ。考えて使いなさい』

「……以上、待たね。b y月見……。……リンディさん。アースラのデータ見せて下さい」

「え？ええ、構わないわ。……これよ」

「ありがとうございます」

どれどれ……。……へえ、良い船じゃないか。でも、使えそうな物は……。……アルカンシエル、これか！！！確かに使えるぞ！！。

「リンディさん？ちよつと手伝って欲しい事が有るんです」

「えっ？ええ、私に出来ることなら」

「簡単な事ですよ。アルカンシエルを撃つて欲しいんです」

「「「えっ!?!」」」

ユーノ、クロノ、リンディさんの驚いた声が響き渡る。

「詳しい話しは……そうですね…明日、はやて達と一緒に話し合いますしょう」

「今日じゃ駄目なのか?」

「この後、はやて達と約束が有るんだよ」

「……そう、それなら仕方ないわね。……では、一刀君。明日、はやてさんの家に行けば良いのかしら?」

「はい。時間は……十時に八神家で待ってます」

「ええ、判ったわ」

そうしてリンディさん達に別れを告げ、ユーノと共に転移魔法で八神家に向かう。

帰ったら、なのは達と一緒になのはの友達の家に行くんだったな。

第十八話（後書き）

次回予告

なのは達と一緒になのはの友達とバーベキューをする一刀とはやて。そこにグリホオンが現れる。

デバイスの修理と強化のためデバイスを持っていないのはとフェイト。一刀、ユート、アルフの三人が応戦するが、空を縦横無尽に飛び回るグリホオンに苦戦を強いられてしまう。

苦戦する一刀達。そこに烈火の剣精が救いの手を差し述べる。

海鳴市の夜空に烈火の炎と真紅の雷が交差する。

第十九話・？

なのは案内されて、なのは、フェイト、はやてと動物モードのユーノとアルフと俺の上着の内ポケットに居るアギトと一緒になのはの友達の家に来た訳ですが……なに？この豪邸。あの世界の城よりは小さいが……この辺りの家とは、比べ物にならない。

豪邸に驚いている間に屋敷の中に招待されてバーベキューまでの時間まで、部屋でゲームをすることになった。

一緒に来たユーノとアルフも部屋でゲーム画面を見ている。

「そうか〜最近、なのはちゃん達が話す友達って、はやてちゃんと北郷君のことだったんだ」

ゲームをしているこの部屋の主、アリサ・バニングスの隣に座っている月村すずかちゃんかはやてと話している。

彼女は、俺のことが苦手らしい。おそらくは彼女の体質が影響しているのだろう。

「なに？すずか……二人を知ってたの？」

「前に図書館で会ったんだよ」

「あんたには聞いてない！！」

「し、ごめんなさい」

何故か、アリサは俺に厳しい。何か怒らせるようなことしたっけ？

「フン」

「一刀？アリサに何したの？（ボソボソ）」

フェイトが耳元で囁いてきた。息が耳にかかり若干くすぐったい。

「何って、初対面だし…別に…」（ボソボソ）」

「初対面！？人の家の車を蜂の巣にしようとして良く言えるわね！！」

よく聞こえたな。

「」「」「蜂の巣！？」「」「」

やっべー。初対面じゃないかも。

《マスター、あれではないですか、ほら、前に車を襲っていた悪魔を倒した時の》

そう言えば、やたら長い車を襲ってる悪魔を倒した時に中の人間が逃げたから、車ごと蜂の巣にした事があっただけ。

「まあ、車のことは良いわ」

「良いんだ？」

高いだろ、あの車。

まあ、弁償しろって、言われても無理だけど。

鉛玉を大量に撃ち込んだから、修理にも出せない。

「そんなことより…何よ、あの化け物は!？」

アリサに肩を掴まれ、めちゃくちゃに揺さぶられる。
これ、普通の人間なら鞭打つになるぞ。

《あつわわわわ》

アギトの悲鳴（念話）が脳内に響く。叫び声を上げないとは…さすがだ。

だが、残念なことに、揺さぶっている間にアリサのテンションが上がって来たようだ。揺さぶる速度が上がる。

「アンタ、あれのこと知ってるんでしょ!？あれと戦ってるのよね!？噂は本当だったの!？まさか、なのは達を巻き込んでるんじゃないでしょうね!？」

鞭打ちの前に、脳細胞が死滅するな、これは。例えると、頭蓋骨の中で脳みそがシェイクされる感じが。まあ、そんな経験無いけど。

「ち、ちよつとアリサちゃん!？」

「それじゃあ、一刀が話せないよ!？」

なのはとフェイトが止めに入ってくれた。

「一刀…だいじょーぶーか？」

はやてはあまり心配していないようだ。まあ、今更、このぐらいでどうこうなる体じゃないが。

「化け物って……今、学校で流行ってる噂のこと？アリサちゃん……襲われたの!？」

フリーズしていたはずかちゃんが驚きの声を上げる。無理も無い。親友が襲われたんだし、下手したら死んでいたのだから。

「そうよ!!そんで、そいつに助けられたのよ!!！」

ビシッと指を突きつけてくるアリサ。

そいつ呼ばわりか……まあ、良いけどさ。

「さあ!!話してもらおうよ!!！」

「判った。だけど、その前に君達の学校で流行ってる噂を聞かせてほしい」

噂……恐らく悪魔関係だが、学校で流行ってるというのは不味い。なにしろ、学校等の特殊な閉鎖空間はたださえこの世成らざる者と呼ぶ。しかも、この土地は次元の壁がゆるい。そんな中で悪魔の話をするれば、本当に悪魔を呼びかねない。

まあ、悪魔よりたちの悪い者を呼ぶ可能性もあるが……とりあえず、何か対策を打たないと取り返しのつかない事態になる可能性がある。

「良いわよ。まず、夜遅く、一人で歩いていると血まみれの人形に襲われるとか……」

人形……マリオネットか。こちらの世界に来たのは良いが、肉体を維持出来ない悪魔が人形に乗り移った雑魚悪魔だ。

「強大なトカゲに追い掛けられるとか…」

トカゲ：ブレイド系の悪魔かな。まあ、実際に遭遇した人は、逃げることも出来ずやられるだろうけど。

「空飛ぶ仮面に襲われたとか…」

なんか？違和感があるな？

「影の獣に襲われたとか」

「ちよつと良いかな？」

「なによ！？」

「みんな、襲われてるけど、死者は出てないのか？」

普通の人間が悪魔と遭遇したら、確実に死ぬだろう。なのに、襲われるや、追い掛けられるだの殺される、死ぬ等の単語が出てこない。ブレイドの話では『追いかけられた』と、まるで実体験のようだ。もちろん、アリサの話方の問題の可能性や作り話の可能性もある。

「死者どころか、大怪我した人もいないの……。ケガも転んだとか、擦り傷とか、軽傷なんだ」

すずかちゃんが不思議つと首を傾げる。

「はあ！？おかしいだろ？」

普通はこう言った話には、救いが無い。その方が怖いからだ。なのに、軽傷者しか居ないなんて、この手の話としては欠陥だ。その分、信憑性は増したが。

しかし、真実だとして、普通の人間が悪魔と遭遇して無事の筈がないんだけど…。

「一刀達が居るからだよ」

「どういうことだよ？フエイト」

疑問に思っていると、笑いをこられたフエイトが口を開いた。良く見ればはやとなのはも笑いを堪えている。表情は分からないが、ユーノモアルフもにたような雰囲気が出てる。内ポケットのアギトからも《あゝっ。なるほど》と念話が届いた。

「あのね…一刀…。話の途中でね…。助けが入るの」

「恐怖で動けなくなつて、もう駄目だつて諦めそうになるとね…。刀を構えた少年が助けてくれるんだ」

「その少年は…たくさんの仲間と一緒に…」

「恐怖を吹き飛ばして、希望をくれるんだよ」

「……………まさか…その少年って……………」

「「一刀（君）達のことだよ」「」

ですよー。そう言えば…海鳴市では悪魔関係の出来事で、死者

は出てないんだった。

俺達が助けたりしてるから。まあ、リンカーコア集めも兼ねているが。

「やっぱり、アンタのことだったの……。なのは達は知ってたのね……」

「……噂は…本当だったんだ……。まさか、なのはちゃん達も……」

アリサやすすかちゃんが何か言ってるが、この噂をどうするか考えていた俺の耳には届かなかった。

基本的には、やはり悪魔の話を学校するのは不味いだろう。だが、この程度のレベルならほっといても問題が無い可能性の方が高い。と言つか無い。

「でも…上の方は…？」

なのは達はまだ低学年だ。こう言った話は高学年になればなるほどリアリティを増し、残酷になって行く。そうになると、殆ど作り話だが危険性は跳ね上がる。

現にある世界の高校では都市伝説が流行り、最終的に冥府の扉が開いた。その世界より次元の壁がゆるいこの世界だ、どうなるか想像がつかない。

この話は帰ったら、みんなと相談した方が良いかも知れない。

「ちょっと聞きたいんだけど……昔、大量の行方不明者が出たことがある？」

フツと疑問に思ったことを口にしてみる。

この世界なら、そう言った事件が有ってもおかしくない。

「…確か、戦時中にならあったはず。……空爆も無いのに、百人以上の人が一夜にして消えたんだって」

戦時中か…。こっちの世界の歴史だと…ざっと七十年程前か。よく知ってたな、すずかちゃん。

「場所は分かる？」

「そこまでは……。なにしろ古い話だし」

「そう、ありがとう」

場所は分からないか…まあ、しょうがない。

「そんなことより…次は私の質問に答えてもらおうよ!!」

「……………十八禁って、事で…」すずか、そこにバットがあるから取って「話させていただきます」

アリスの一言を聞いた瞬間、高速土下座。

なんで、釘バットが小学校三年の部屋にあるんだ？それ以前に、この笑顔で殺気を放ったりするあたり……さすがなのは友達。

「じゃあ、まず…」

その後、悪魔のことや俺が人間を襲う悪魔を退治をしていること等を、掻い摘んで話した。

「悪魔ねえ……………」

顎に手を当てて何か考え込むアリサ。
眉間に深いシワが刻まれている。

「なのはちゃん達は、北郷さんの手伝いをしてるんだ…」

冷静なすずかちゃん。

しかし、二人ともすんなり信じるんだな。素直で良いけど。

「う、うん…一応」

「そつだよ…一応」

「そつやね…一応」

その三人の様子を見ていたアリサが「……………決めた!! 私もアン
タを手伝う!!」っと言ってきた。

「アリサちゃん!?!なに言ってるの!?!」

「そつだよ!!アリサ!?!」

「アカンよ!?!ほら、すずかちゃんも何か言ってる!?!」

「あ!私も手伝いたい」

「「「すずか(ちゃん)!!?!」「」」

おー息ぴったりだな。さすがなのは達。
まあ、俺としては、予想通りでしたよ。

「良いでしょ？なのはも手伝ってるんだし、なのはよりは運動神経は良いわよ」

なのはを基準に考えてもな…。

「どついう意味！？」

そついう意味ですが。控え目に見ても、なのはの運動能力は…高くない。むしろ低い。恐ろしく低い。

その分、魔法戦は強いんだけど…。魔法能力と運動能力を足して2つで割れば、ちよつど良いんじゃないか。

「とにかく、私達も手伝うから！！」

この子も…言い出したら聞かなそうだな…。すずかちゃんも。

さすが、なのはの友達つてとこだな。なのはも言い出したら人の話を聞かないし。

「……ちよつとタイム。なのは達、集合」

なのは達が周りに集まってくる。そのまま円陣を組む。

「さあ、どつしようか？」

とりあえず、みんなの意見を聞こつ。

「ダメに決まつてるよ！！」

「アカンに決まつとるやろ！！」

「そうだよ!!」

判っていたけど、なのは、はやて、フェイトの三人は反対か。

「良いんじゃないかな」

「ユーノ君!？」

ユーノは賛成か……。

《あたしはパス》

《同じく、そもそも、二人をよく知らないしな》

《私達はマスターに任せます》

危険がアルフ、アギト、紅達の5人か。

「ちなみにアリサ達は…素直に他人の言うことを聞くのかな？」

聞かない気がする。なにしろ、目の前にいる分からず屋の友達だし。

なのはも可愛い顔して、何だかんだで自分の意志を貫く。それが良いところでもあり、欠点でもあるんだけど。

「……自分が間違ってた時とかは……」

つまり、それ以外は聞かない訳ね。

「……どうしようか?一刀?」

この場で、唯一ーいや、俺も賛成だから唯一じゃないなーの賛成意見のユーノが尋ねてくる。

どうしようかね……。迷っていると部屋の扉が力強くノックされた。

「アリサ！！！そろそろ、飯にしよう。私は腹が減った！！華琳様もお待ちだぞ！！！！」

聞いたことのある声だ。

それより、ノックの度にドアが……。これは間違いなく壊れるな。破片をガードした方が良かったかも。

「ちよつと、ま「待たん！！」

次の瞬間、轟音と共に、ドアが吹き飛ぶ。吹き飛んだドアは壁を突き抜け、庭に落ちていった。破片どころか……。そのまま飛んだよ……。

「……………」(なのは、フェイト、アルフ、アリサ、すずか)

みんな、金魚みたいに口をパクパクさせている。

目の前をドアが弾丸並みの速度で通過したんだから無理もないか。

《一刀の知り合いでしょ。あの子》

一人、落ち着いているユーノ。

扉のあった場所を指さしている。

《まあ、そうです》

見た目は、子供だが…間違いなく春蘭だ。
おっ？目がある。

「ん？……おお！？北郷か！？華琳様がお待ちだ！さあ、行くぞ！」

「ち、ちよつと待てえええ………」

首を捕まれ引きずられていく一刀。叫び声が段々小さくなっていった。

「……私達も行くのか…ユーノ君、おいで」

「……うん、行こうアルフ」

「……ドアが…飛んだ？…あ、ハハハハ」

茫然自失のアリサ。

「大丈夫？アリサちゃん？」

「…すずか……」

「よしよし、私達も行くぞ」

第十九話・？（前書き）

更新遅くなつてすみません。

第十九話・？

アリサ家の庭では、二人の少女と数人の家政婦がバーベキューの準備をしていた。

壁を突き抜け落ちてきたドアは全員スルーしている。犯人は解っているし、彼女の起こすハプニングには、全員慣れていた。

「華琳さま〜」。秋蘭〜」

北郷一刀の首をつかみ引きずりながら満面の笑みを浮かべた春蘭が駆けてきて、華琳達の近くで地面を削りながら止まる。

「や、やあ。久しぶり…華琳、秋蘭…」

ボロボロの一刀が、華琳達に手を上げて挨拶をする。
ちなみに春蘭をまだ手を離していない。

「久しぶり…じゃないわよ!!」

「うむ。お前には言いたい事が、山のようにある」

「覚悟してなさい」

殺気を放つ二人。春蘭は一刀を引きずり回したので、だいぶすつきりしたらしい。まあ、後でボロボロにする気だが。

「今…じゃあ、ないのか」

それはそれで、死刑宣告みたいで厳しい。

「これから、バーベキューでしょ。私達だけなら今すぐやるけど、あの子達も居るの」

「そういつ訳だ。なにしろ子供の教育上、あまり良くないからな」

何する気なのだろうこの人達は。

「ところで、春蘭？あれは何かしら？」

華琳が庭に落ちて突き刺さっているドアを指さす。

「？扉…です」

「ええ、そうよ。私が聞いているのは、なぜあそこに扉が刺さっているのか、と言うことよ」

「そりゃあ、私が飛ばしたから…で……………」

ヤバいと感じたのか春蘭が口ごもる、が残念ながら遅かった。形の良い眉をつり上げた華琳が、春蘭に近づいて行く。

「春蘭……。ちょっと来なさい」

「あ、あの華琳さま……………」

華琳に建物の影に連れて行かれる春蘭。入れ違いになのは達が、庭に出て来る。

「…………さて、始めようか」

無視を決め込む一刃。やぶ蛇はごめんである。

「うむ」

物陰から春蘭の断末魔らしきものが、辺りに響き渡った。

次元の狭間

魔界と人間の間に来た次元の狭間に強大な大鷲に似た悪魔『グリフォン』と配下の下級悪魔が集まっていた。

彼らがここに集まった理由は、先日、彼らの下を訪れたある人物がこの場所に人間界への道を開くと言ったからだ。

その人物は人間、いや、元人間だったと言るのが正しい。なぜなら彼の魂は魔に堕ち変容を遂げていた。

当初、そんな者の言う事など聞く耳を持たなかったが、彼の『道を開く対価として、北郷一刃を殺して欲しい』との一言に気が変わった。

（北郷一刃…あれらを救いに魔界に降りてきた上に、無事に帰還を果たした人間）

実は、彼が前回魔界にきた時、グリフォンは遙か上空から見ている。そして彼にファントム達が力を貸したのも。

ファントム達が彼に力を貸した理由も、彼はなんとなく理解していたが、やはり自分自身で確かめてみたくなったのだ。北郷一刃という人間を。

（さあ。見せてもらおうぞ。北郷一刃）

次元が裂け、人間界への道が開かれる。歓喜の声を上げながら配下の悪魔がそれに飛び込み、彼もその裂け目に飛び込んだ。

八神家

八神家の上空、気配を感じ取られないギリギリの所に劉協は浮かんでいた。

八神家に残っているメンバーの足止めをするためだ。何しろ、ここには守護騎士に多数の武将が居るのだ。いかにグリフォンと配下の悪魔と言えど、一刀と戦いながら彼女達の相手は無理だろう。

(ちよっかいを出されると迷惑なんでね)

懐から出した鏡の破片に獣の首を使い集めた魔力を流し込む。

「さあ、頼むよ。僕の死霊達」

そう呟いた彼の周りに無数の死者が現れる。それは、海鳴市で死んだ人達だけでは無く、あの世界で死んだ人も含まれていた。

「ふっはははは！！素晴らしい、素晴らしいぞ。獣の首！！いや、悪魔の力！！」

高笑いを上げる劉協。

死霊の軍を失った彼だが、突破の鏡の破片と獣の首で集めた悪魔の魔力に彼がこの世界で殺した人の恐怖や憎悪を使い、死霊の軍を復活、いや、新たに作ったのだ。

「さて、そろそろ時間だ。僕の軍の御披露目という」

アリサ邸

突然、辺り一面に金属を切り裂くような音が響いた。

「な、なに!？」

「!全員!!こっちに集まれ!!家政婦さん達も急いで!!」

アリサが驚きの声を上げた瞬間、事態を把握した一刀が結界の用意をする。

「華琳達?戦える?」

「当たり前でしょ」

「いや、見た目、子供だしさ」

「北郷。私達は、助っ人の役も兼ねているのだぞ?戦えないでどうする?」

いくら見た目がなのは達と同じでも、戦闘力はその世界にいた時と大差ない。間合いや筋力などは下がって居るが、それをデバイスで補っているので問題ない。それにいざとなれば、切り札もある。

「第一。ほかの子達は戦えたでしょ?」

「そうだけども...。つい」

華琳のもつともな意見に頬かく一刀。と言うか自分の見た目も子供なのだが。

その時、一際大きな金属音が鳴り響く。

「なにあれ……?」

「ちッ！面倒な奴が！」

すずかの指差す先を見て、舌打ちをする一刀。視線の先には翼を広げた巨大な鳥と無数の悪魔が次元の裂け目から『こつちの世界』に出てきていた。

「華琳、春蘭、秋蘭。君達はみんなを頼むよ。この結界は簡単には破れないけど、万が一って可能性もあるし。ユーノ、俺たちであいつらの相手をするぞ」

「待ちな。あたしも手伝うよ」

『犬が喋った!?!』

アルフが喋ったことに、驚愕する一般人の方々。

「あたしはいぬ」「はいはい、時間無いから後でね」「うっ……」

「一刀!? 私も戦うよ!」

「フェイト、今デバイスが無いだろ。今回は俺達に任せて、ね?」

自分も戦うと言うフェイトにまるで幼い子に言い聞かせるように優しく言う一刀。

「ユーノ君……。無理しないでね」

ユーノを抱き締めながらなのが言う。

なのはも今はデバイスを持っていないため、戦闘に参加できない。

「うん。大丈夫だよ。…いつもと逆だね」

『フェレットが喋った!?!』

フェレットが喋ったことに以下略。

「緊張感が無いわね…」

「あっははは…」

と言ってる割には嬉しそうな華琳に苦笑いを浮かべるはやて。

「さて、と。そろそろ行きますか。つとはやて、アギトよろしく」

一通りの説明をみんなにした一刀が、はやてにアギトを預け、刀を抜き境界の外に出て行く。その後を人の姿に戻ったユーノとアルフが続く。

「作戦は？」

ユーノが尋ねる。

「とりあえず、周りの雑魚を倒そう。みんなの安全確保が最優先だ」

「あの鳥は？一番強そうだけど？」

アルフが上空にいるグリフォンを指差す。

「…多分、みんなには手を出さないと思うから、後回し」

「わかった」

アルフが頷くと同時に、無数の悪魔がうなり声とともに一刀達に飛びかかる。

「バインド！！」

ユーノがバインドの魔法を発動させ、悪魔達を空中に固定し、一刀とアルフが切り、殴りとどめを刺す。

「うあ…。最悪…」

ダイレクトに悪魔を潰す感覚に、顔をしかめるアルフ。おまけに紫色の血が飛び散り、体にかかった。一瞬、体に害があるのでは？と思ったが、近くで一刀が悪魔を切りまくって血まみれになっても気にした様子が無いので、恐らく平気だろうと自分に言い聞かせ、次の悪魔に殴りかかる。

「チェーンバインド！！」

ユーノが空を飛んでいる悪魔をチェーンバインドで捕まえ地面に叩きつける。

そこに、一刀が文字通り必殺の斬撃を放ち、悪魔を切り裂く。

悪魔が切り裂かれたのを確認する前に次の獲物をバインドで足止めし、そこに一刀が円刃に変形させたパンドラを投げる。弧を描いたパンドラは一刀の狙い通りに悪魔を襲い、パンドラの刃に切り刻

まれ、紫色の血しぶきを上げながら悪魔が絶命する。
さらにパンドラが戻ってくる前に無名刀で数十体の悪魔を切り裂く。

「しかし……減った気がしない」

戻ってきたパンドラを基本形態に戻した一刀がやや呆れたような顔をする。かなりの数の悪魔を倒したが、それ以上に沸きだしているみたいで数が減らない。

「そつだ、ね!」

悪魔を気で強化した回し蹴りで吹き飛ばしながらユーノが答える。

「お。いい一撃!」

パンドラをガトリング砲に変形させ、弾幕をはりながら一刀がユーノを誉める。

今の一撃は、悪魔とはいえ必殺の威力を充分に秘めていた。

「そんなことより、あれ使わないの!? あのミサイル撃ちまくるやつ!」

「ああ、あれか」

考え込む一刀。

「何でも良いから!? このままだと数に押し切られる!」

ユーノが叫ぶ。やはり数に差がありすぎる。既に数十体以上の悪

魔を倒したにもかかわらず、悪魔達の数は減るどころか、増える一方だ。今の所、なのは達の方に近付く悪魔は華琳達によって倒されているが、それも何時まで保つかかわからない。

この辺りで、一掃は無理でも、数を削ぎ落とさなければ質量差で負けるのは目に見えている。

「いや、一掃する方法は有るんだけど……アリサの許可がいる」

「アリサの？」

全員の視線がアリサに向く。ちなみにユーノと一刀とみんなの距離は数十メートル以上離れているが、華琳達のデバイスが通信機の役割を果たしているため今の会話が聞けた。

「えっ？えっ？」

「どんな被害が出ても、文句言わない？」

「この状況なら言わないわよ！？」

よし！！言質とった！！

心の中でガッツポーズを取る一刀。

なにしろこれは数多くあるパンドラの攻撃方法の中で最強の威力を誇る。外界とは結界で遮断しているから平気だが、結界内の建物は無事では済まないだろう。

「ユーノ、アルフ！！みんなの所に！！ユーノはシールド使って最大出力で結界よろしく！！」

「わ、わかった」

ユーノとアルフがはやて達の方に駆けてくのを援護しながら、自身の体の表面に魔力の鎧を形成していく。

生身では一刀と自信も危ないからだ。一度喰らったことがあるが、あんな思いは二度とごめんである。

（もう良いかな）

ユーノが結界を貼ったのを確認し、トランク状態のパンドラを地面に置き開く。

パンドラを開くためにかがんだ一刀の行動を隙と勘違いした悪魔達が一刀に飛びかかる。

「……………」

はやて達が声を上げようとした次の瞬間、辺りはパンドラから放たれた閃光に包まれた。

十九話・？

北郷一刀達が悪魔達と戦っている頃、八神家上空では劉協が死霊を操り八神家を強襲しようとしていた。

しかし彼にはいくつかの誤算があった。

一つは死霊は火に弱い。現に前の世界で、呉の周公謹、冥林の火計により大打撃を受けた。

2つ目は北郷一刀の戦闘力のみが目が違って、彼の持ち物に多様な魔具があるのを忘れていた事。

3つ目は、以上にすぐれた『勘』の持ち主が八神家に居た事。

劉協が召喚した死霊達を八神家に向かわせようとした瞬間。

「火竜……………一閃！！！！」

騎士甲冑の上に黒いマントを羽織ったシグナムが炎を纏ったレヴアンティンで死霊達をなぎ払う。

「しゅ、守護騎士だとオオオオツ！？バカな！？気配などなかった！！いや、それ以前に何故！？僕に気づいたっ！！！！？」

急に現れたシグナムに動揺が隠せない劉協。

「！！」

首にかけていた獣の首が危険を訴えたので慌てて回避行動をとる。劉協がいた空間を一筋の光が通り過ぎた。

「全く……………毎回、策殿の勘には驚かされる」

弓を引きながら祭が苦笑を浮かべる。

「たまたま雪蓮の顔を見に八神に寄ったら、いきなり嫌な予感がすると雪蓮が言うではないか。」

「すぐさま空を見れば遙か上空、雲の上に宿敵である劉協が死霊と共に浮かんでいた。こちらが気づいていないと思っている今が好機と、シグナムが一刀が置いていった魔具を使い気配を消し空に上がり、同じ魔具で姿を消した祭が屋根の上から狙撃するタイミングを狙っていたのだ。」

「しかし、この外套は便利だの。姿を消せるか……」

「ほんと……一刀の物らしいけど……どこで手に入れたのかしら？」

「その話しは後にしろ」

雪蓮と祭にやや呆れたようなファントム。

「はいはい。……それじゃあ私達も行きましょうっ！！」

『おっ！！』

ヴィータ、シャマル、ザフィーラと一緒に空にあがる雪蓮。

「ネヴァン、お主は行かんのか？」

「私が行っても足を引っ張るだけよ？」

ネヴァンの戦闘スタイルは一体多数の戦いに向いている。この場合の一は自分で多数が相手だ。一方で一体一や集団戦闘には向か

ない。特に集団戦闘は同士討ちに成りかねない。

「まっ。あの子達なら平気でしょ」

アリサ邸

ボタンとパンドラを足で締め辺りを見回す一刀。

手入れが良くされていた庭は見るも無惨な状態で建物も倒壊せず建っているのが不思議な程破壊されていた。

その分、雑魚は一掃できたが、上を見ると。

（ちっ。無傷か……）

上空のグリフォンを睨む一刀。距離が離れすぎていた為にダメージを与えられなかったようだ。

「まっ、予想通りだから良いけど」

元々、今ので倒せるとは思っていない。

（それよりも次元の裂け目が閉じた方が問題だ）

あれは、人工的に作られた裂け目だ。そして、そんな事が出来る人間はこの世界には数える程もない。

（開いたのは、ほぼ確実に劉協だ。なら、劉協に何か有ったか……）

物思いにふけていた一刀の横にグリフォンが放った雷撃が落ちる。

『一刀！？』

(考えるのは後にするか…)

拳銃『朱雀』を取り出し、グリフォンに向かい発砲する。

しかし空中を縦横無尽に飛び回るグリフォンには当たらない。

「ハア！！」

空中に飛び上がったアルフが気合いを込めた一撃を繰り出すが、グリフォンは巨体に似合わず俊敏な動きで回避する。

「速い！？」

「アルフ！危ない！！」

アルフの死角からグリフォンが放った雷の鳥がアルフを襲う。フェイトが危険を知らせようと叫ぶが間に合わない。

「！しまっ…！」

「プロテクション！！」

いつの間にかフェレットに変身したユーノがアルフの肩の上に乗っており、プロテクションを発動させ、雷の鳥を防ぐ。

「いつの間に！？まあ、助かったよ」

「そんなことより、前々！！」

空中で方向転換したグリフォンがアルフ達に突撃してくる。そこに飛び上がった一刀が割って入り、神速の抜刀術を放つ。

「っ！？今のを避けるか！？」

空中で巨体をひねり斬撃をかわす。

「捕まりな！」

「すまない！」

アルフの伸ばした手に捕まる一刀。自力での飛行が出来ないからだ。

「ユーノ！？足止め出来ないか！？」

「無理だ！！バインドを簡単に千切る！！！」

ユーノのバインド魔法はグリフォンの強靱すぎる翼によりあっさり千切られ、足止めにならない。

「来るよ！」

「プロテクション！！！」

雷を纏ったグリフォンが突撃してくる。

回避は無理と判断したユーノがプロテクションを発動させる。

「っ！！！！！」

「不味いね……」

「空は奴のテリトリーだからな」

あの高速移動について行けるのはフェイトぐらいだろう。

(しかし不味いぞ。もう少し地上に近ければどうにでもなるが……はやて達に危険が及ぶかもしれない)

結界やグリフォン自身が狙わないと言っても万が一という可能性もある。

(デバイスを展開しても、飛行出来ない以上、意味がない。補助、強化魔法も同じ……。どうするかな)

「ああもっつ!!—刀!口閉じてな!!行くよ!!—」

「えっ?」

「オラアア!!—!!」

イライラが頂点に達したアルフが一刀を全力で投げる。もっむちやくちやである。

「なに?」

さすがにグリフォンもこれに驚き、動きが一瞬止まる。その一瞬でグリフォンに迫った一刀が翼を斬りつける。

「ぐっ!!」

「まず一撃!!」

「おのれ!!」

落ちていく一刀に雷撃を放とうと意識が集中した瞬間。

「よそ見かい!?!」

グリフォンの顔の横に迫ったアルフが、今が好機と全身全霊の右ストレートを叩き込む。

ドコツ!!!!

「ッ!ちよつと痺れた」

顔をしかめるアルフ。殴った時にグリフォンの体に流れている電気が感電したようだ。

「そんなことより一刀は!?!」

耳元でユーノが叫ぶ。一刀が上がってきた時より高度が上がっているのだ。いくら一刀でも、どうなるか判らない。

そんなユーノの心配をどこ吹く風つと、平気な顔をしたアルフ。おまけに

「こんぐらいじゃ死なないだろ?」

「……………確かに」

八神家・上空

「紫電一閃！……！」

「ギガントハンマー……！」

シグナムとヴィータが劉協に怒涛の勢いで攻撃を繰り返す。その攻撃を劉協は、左右の手に持った剣で受け止める。

『なっ！？』

「ハア！」

シグナム達の攻撃を受け止め動きが止まった劉協にザフィーラが殴り掛かる。

「舐めて貰っては困る」

「ガッ！？」

迫り来るザフィーラに高速の蹴りを浴びせる。九の字に曲がったザフィーラの体にめり込んでいる足が一瞬、魔力光で輝き、次の瞬間に爆発する。

『ザフィーラ！？』

シグナム達が叫び声を上げる。

吹き飛ばされたザフィーラだが、シグナム達の声に反応してすぐに体勢を立て直す。腹部の肉が抉れ、内臓が見え、大量の血が流れていた。もし、普通の人間なら上半身と下半身は永遠に別れるこ

とになっただろう。

「……大丈夫……だ」

「どこがよ……！シヤマル、回復急いで……！」

「は、はい」

シヤマルが回復魔法を掛けるが、かなりの重傷だ。この戦闘に復帰するのは無理だろう。

「頑丈な奴だ……。む？足が？」

シグナム達を払いのけた劉協が困惑の表現を浮かべる。ザフィーラを蹴った足が折れているのだ。どうやら、めり込んでから爆發させる一瞬の間に折られたようだ。

「ちっ。下郎……が……！」

劉協が油断した一瞬に、背後に潜んでいた明命が魂切の刃で首を切り落とす。

「今です……！」

「紫電一閃……！！……！」

「ギガントハンマーアアアアア……！」

シグナムの刃が劉協の体を断ち、ヴィータのハンマーがとどめと叩きつけられる。

「やった……か？」

シグナムの発言に首を振り、雪蓮が答える。

「……いいえ。これを見て、途中からすり替わっていたよね」

雪蓮の手に破れた人型の紙が握られていた。

ヴィータの一撃を喰らい術が解け、宙を舞っていたのを捕まえた。

「これは？」

「分身みたいなものよ。詳しくは一刀に聞いて」

「そんな事より、はやて達だ!!」

ヴィータが割ってはいる。劉協の術より、連絡の取れないはやて達の方が心配だった。

「……そうだな。シャマル、私達は主はやての下に向かう。留守は頼んだぞ」

「ええ、わかったわ。気を付けて」

「私達も行くわ。後、華陀を呼んどいたから、ザフィーラの治療を手伝ってもらいなさい」

ザフィーラの傷はとりあえず、出血は止まったが、このままでは長く保たないのは、誰の目でも明らかだった。

「はい」

頷いたシャマルがザフィーラを連れて八神家に降りていくのを見届けてたシグナム達は、はやて達の下へと急いだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7249k/>

リリカルなのは～天の御遣いと呼ばれた男

2010年11月1日23時11分発行